Fate/Phantom Order

坂本コウヤ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

現代社会のどこにでもいそうなオタク系男子が、よくある神様転生にて『ファントムオブキル』の世界、『天上界』へと、斬ル姫達のマスターとして転生させられる。

マスターとして、ラグナロク教会からの依頼をこなしていたある日、パートナーであるティルフィングと共に、『ＦＧＯ』こと『Ｆａｔｅ／Ｇｒａｎｄ　ｏｒｄｅｒ』の世界にある始まりの特異点、『特異点Ｆ』に飛ばされてしまう。

果たしてマスターとティルフィングは、無事元の世界に戻れるのだろうか。

ＦＧＯとファンキルのクロスオーバー小説が探してもなかったので、自分で書きました。

タグや以下の要素が苦手な方はブラウザバック推奨です。それでもいい方は、そのままお進みください。

・他作品ネタ（主に特撮やカードゲーム系）

・作者の独自解釈、独自設定

・その他二次創作要素

２０１９／４／２０　タグに『男の娘』を登録しました。それに伴い、『性転換』タグと『ＴＳ』タグを外しました。紛らわしい事をして

しまってすみません。
２０１９／８／４　タイトルを『Ｆａｔｅ／Ｇｒａｎｄ　ｏｒｄｅｒ×ファントムオブキル』から、『Ｆａｔｅ／Ｐｈａｎｔｏｍ　Ｏｒｄｅｒ』に変更させて頂きました。案をくださった遊霧　粋蓮さん、ありがとうございます。
また、各話に脚注機能を用いた単語の説明を随時追加しています。よろしければ、そちらも見てください。

目次

Ｆａｔｅ／Ｇｒａｎｄ　Ｏｒｄｅｒ×ファントムオブキル　キャラ設定（ファンキル編）　1
プロローグ　11
序章：天上界にて
第１話：転生してからの日常　18
第２話：真夏の休暇　32
第３話：異世界からの襲撃（前篇）　44
第４話：異世界からの襲撃（中編）　51
第５話：異世界からの襲撃（後篇）　56
第６話：交差する運命（前篇）　66
第７話：交差する運命（中編）　75
第８話：交差する運命（後編）　81
第１章：特異点Ｆ―人理を救う者達との邂逅―
第９話：クレア、特異点に降り立つ　93
第１０話：状況整理？　97
第１１話：合流と初邂逅　104

Ｆａｔｅ／Ｇｒａｎｄ　Ｏｒｄｅｒ×ファントムオブキル　キャラ設定（ファンキル編）

クレア・バラージュ（Ｃｌａｒｅ　Ｂａｌａｚｓ）
イメージＣＶ．好きな方でどうぞ
性別：男性（ただし見た目的には女、俗に言う男の娘）
身長：１５６ｃｍ（ティルより少し小さいくらい）
年齢：１８
設定：
天上世界にて、ティルフィング達キル姫（キラープリンセス）を束ねるマスターの一人。
性格は明るく気さくだが、どこか気取った感じのしゃべり方を好む節がある。他人を褒めたり、笑顔になるのが好きだが、自分の事になると評価は割と下目に見てしまう悪癖があり、本人も自覚はあるも、直せなくて少々困ってる模様。
元々はサブカル好きなただのオタクだったが、テンプレ的な事故により死亡。
そこを神様に拾い上げられるも、転生先が『ファンキル』だと知ると、『外見と声を女性のものに』という外向きの特典以外は特に何も望まずそのまま承諾。
そして、転生後記憶を失い草原で倒れていた所をティルフィングに助けられ、以後彼女と行動をともにしてきた。
今では記憶もある程度戻っていて、「自分が転生者という『異分子』」という自覚もあり、一時期そのことでいろいろと苦悩するも、現在ではティルフィングやその他大勢の仲間達と日々を逞しく生き抜いている。
趣味は歌を歌う事と、カッコいい事探し。特に後者は、普段隊の皆に着せ替え対象として弄られる様になってから始めた事だが、「『漢』としてのカッコよさを求めようと色々する姿と普段のギャップで余計可愛く見えて仕方がない」とは、着せ替えの主犯のＴ氏とＬ氏の談。

なお、歌は普通に上手い。
また、彼には彼自身知らない何かがあるようで・・・。
ティルフィング（Ｔｙｒｆｉｎｇ）
ＣＶ．雨宮天
性別：女性
身長：１６０ｃｍ
キラーズ：魔剣『ティルフィング』
設定：
『ファンキル』のメインヒロインといっても過言ではない、『ファーストキラーズ』と呼ばれるキル姫達の一人。クレアや相棒のデュリンからは『ティル』の愛称で呼ばれている。
性格は冷静沈着で思慮深いが、時々少し天然が入る。
天上世界にて記憶を失い、異族に襲われそうになっていたクレアを助け、以後行動を共にする。
クレアが転生者である事は本人から聞いて知っており、それを知ってもなお、彼をマスターと慕っている。
現在は隊のリーダーとして、癖の強いメンバーをまとめる役割を引き受けている。
趣味はデュリン、およびマスターであるクレアの着せ替え。デュリンの着せ替えは元々原作上での趣味でもあるが、今作ではマスターであるクレアの見た目が彼女の琴線に触れたのか、彼も着せ替えの対象になってしまっている。着せ替えは（クレア視点で）主犯としてもう一人Ｌ氏がいるが、彼女が主にファンシーな見た目の着せ替えをするのに対し、ティルフィングは主に少し露出のあるクールな感じの見た目で着せ替える。ただし、たまに何かの拍子の暴走して（自主規制）な見た目に着せ替えたりしてくるので、その時ばかりはクレアも嫌がって逃げ回る事も（なお、たいてい追いつかれる模様）。
デュリン
ＣＶ．阿澄佳奈
性別：女性
身長：不詳だけど聞いちゃダメ←最近１５ｃｍと判明

設定：
ティルフィングと行動を共にする妖精。『失われた千年王国編（ロストラグナロク）』開始（？）まではログボの受け渡しをやってた為、そっちで覚えてる人も多いかも。クレアからは普通に『デュリン』と呼ばれている。
ティルフィングの世話をするのが好きで、大抵彼女の傍にいる事が多い（仕事中等を除く）。また、たまに他のキル姫間の伝令のようなの事をしてる事もあるとかないとか。
小さな妖精なため、身長の事を気にしており、上から見下ろされるのを嫌う。なお、たいてい（高級）チョコを上げると機嫌が元に戻る模様。
クレア同様『Ｔ氏』の着せ替え対象の一人の為、その事でクレアと二人で話す事もある。なお、なぜか高確率で『Ｔ氏』に密会がバレてそのまま着せ替えに連行される模様。
ロンギヌス（Ｌｏｎｇｉｎｕｓ）
ＣＶ．花澤香菜
性別：女性
身長：１４８ｃｍ
キラーズ：聖槍『ロンギヌスの槍』
設定：
クレアの隊に所属する『ファーストキラーズ』のキル姫の一人。クレアからは『ロンちゃん』という愛称で呼ばれている。
性格は人見知りで内気、常にへっぴり腰の臆病気質。戦いを好まず慈悲深い優しい心の持ち主だが、こうと決めると引かない芯の強さもある。また、男性恐怖症だが、マスターであるクレアの事は最初は女と勘違いしていたため、怖いという感情はなかった模様。
クレアの真実を知る一人ではあるが、そんな彼を変わらずマスターとして慕っている。
趣味は人の為になることと、クレアの着せ替え。前者は原作での趣味だが、後者はクレアの見た目が彼女の琴線に触れた模様。ティルフィングと違い、ファンシーな見た目の着せ替えを好むためか、そういった服を持った時の彼女に対して、クレアは少し苦手意識を持って

いる。
レーヴァテイン（Ｌａｅｖａｔｅｉｎｎ）
ＣＶ．ゆかな
性別：女性
身長：１６４ｃｍ
キラーズ：魔剣『レーヴァテイン』
設定：
クレアの隊に所属する『ファーストキラーズ』のキル姫の一人。クレアからは『レヴァさん』の愛称で呼ばれているが、あまり好きではない。
性格は表面上無気力で面倒くさがり、非常にクールで他人と絡むことを嫌がり、奔放で孤高といった感じだが、その裏には自らのキラーズの伝承である「世界を焼き滅ぼした」という記憶に起因した、ある種のトラウマや加害妄想が根底にある為、本当は実はさびしがり屋。が、他人があくせくしてる横で昼寝するのが好きと言ってることを考えると、めんどくさがりな気質は元々持っている模様。
現在は色々と構ってくるクレア達をうっとおしいと思っているが、自分の中で温かい気持ちが湧いてくるのも感じていて、「まぁ、悪くは無いかな。」とそんな状況を受け入れている（本人曰く、「悪友ぐらいならなってもいい」との事）。
クレアがＴ氏やＬ氏（名誉の為に伏字）から逃げ回る時に匿ってもらう対象の一人だが、たいていはそのまま放置したり、匿うフリをしてＴ氏やＬ氏に横流しして『愉悦』してたりする。
趣味は原作通りお昼寝。なお、邪魔をするとしばらく口を聞いてくれなくなるか、最悪その辺が死病累々となるとの事（クレア談）。
フライクーゲル（Ｆｒｅｉｋｕｇｅｌ）
ＣＶ．釘宮理恵
性別：女性
身長：１５６ｃｍ
キラーズ：伝承に描かれる魔弾『フライクーゲル』
設定：

クレアの隊に所属する『ファーストキラーズ』のキル姫の一人。クレアからは姉のフライシュッツと区別するため、『クーゲル』『クーちゃん（この呼び方は姉のフライシュッツが発祥）』と呼ばれている。
性格は常にハイテンション、フルスロットル。動いて、喋っていないと死んでしまう、というくらいに活動的。『ヘァピィ（Ｈａｐｐｙ）☆』が口癖で、『ハッピー』と発音すると『ヘァピィ☆』と訂正してくるあたり、発音にもこだわりがある模様。また、これ以外にも何かと英語を多用する（例：『Ｈｅａｒｔ　Ｂｅａｔ』ｅｔｃ．）。
クレアがＴ氏やＬ氏（名誉の為に（ｒｙ）から逃げ回る時に匿ってもらう対象の一人。ただしその後、ハイテンションで趣味の物々交換用の物集めに連れ回される事あり（ただし後述の通りレアものを見つけるきっかけにもなるため悪い気はしないらしい。）。
趣味は先ほども書いたが、原作通り物々交換。彼女の物々交換ではたまにレアものがあるらしく、クレアも利用することがある模様。

マサムネ（Ｍａｓａｍｕｎｅ）
ＣＶ．井上麻里奈
性別：女性
身長：１５９ｃｍ
キラーズ：伝説の島国に名を残す名刀『正宗』
設定：
クレアの隊に所属する『ファーストキラーズ』のキル姫の一人。クレアは普通に『マサムネ』と読んでいる（理由：他の呼び方も出来そうだが、どれもしっくり来ない）。
隊に所属する『ファーストキラーズ』の中でも特に、忠義や仁義を重んじる性格で、曲がったことは大嫌い。マスターであるクレアの事は『主君』と呼び、武士を思わせる振る舞いを見せている（なお、クレア的にはもうちょっとくだけた感じでもいいと思っているが、アレも個性かと半ば放置している模様。）
また、キラーズの中でも『正宗』という、複数の名刀の名前となっているものがキラーズとなっているからか、斬ル姫の『淘汰』の概念に対して唯一疑問を抱いており、時折『主君』であるクレアとも度々

その事を話し合ったりしている。
趣味は原作通り素振り。また、時々他の剣を振るう斬ル姫と一緒にやっている姿が目撃されている。
パラシュ（Ｐａｒａ☒ｕ）
ＣＶ．伊瀬茉莉也
性別：女性
身長：１５２ｃｍ
キラーズ：ラーマの斧『パラシュ』
（『パラシュラーマ（Ｐａｒａ☒ｕｒａｍａ）』とも呼ばれている）
設定：
クレアの隊に所属する『ファーストキラーズ』のキル姫の一人。クレアは普通に『パラシュ』と呼んでいる（理由：いじりようがない）。
努力家で妥協がなく、自らが思い描く、理想高い姿に近づくために日夜邁進している。その為、後述のアロンダイトとは扱う武器も異なり、同郷でもないものの、時々一緒に鍛練を積んだりするほど。
また、原典たるキラーズの記憶から、異常なまでの執念深さと、標的を殲滅するまで戦い続ける非情さを持つ。ただし、マスターであるクレアの指示にはある程度従う為、完全に融通が利かないわけでもない。
趣味は原作通り理想像のイメトレ。同郷のインド系斬ル姫曰く、瞑想しながらやっているとか。
アスカロン（Ａｓｃａｌｏｎ）
ＣＶ．戸田めぐみ
性別：女性
身長：１５８ｃｍ
キラーズ：聖ゲオルギウスが持つ魔法の剣『アスカロン』
設定：
クレアの隊に所属する、『セブンスキラーズ』と呼ばれるキル姫達の一人。クレアからは時々『アッスー』の愛称で呼ばれている。
性格は少しおっちょこちょいだが、笑顔が魅力的な頑張り屋。マスターを始め、キル姫達の妹分的な立ち位置のムードメーカーで、隊の

空気を明るくしてくれる元気っ子な一面も。ちなみに、甘えることが多いのはマスターであるクレアか、同じ『セブンスキラーズ』の1人のフォルカス。特にフォルカスとは、普段から一緒に行動することも多く、二人セットで考えられることもある。

それと、わざとなのか天然なのか、ティルフィングがクレアに対して抱いている恋心を少しはき違えている面があり、ティルフィングがクレアの事を気にしてると、『昔からずっと一緒にいるから、気にしてるのかな』と考えてたりするほど。おまけに妙なお節介を焼くため、ティルフィングからは時々『意地悪』と思われてる・・・、が、とうの本人は気づいていない模様。また、クレアの修羅場（主な原因はティルフィングとフライシュッツ等）に遭遇するとアワアワしてしまう可愛い一面もある。

クレアがT氏やL氏（名誉の為（ｒｙ）から逃げ回る時に匿ってもらう対象の一人・・・、なのだが、憧れの先輩たるティルフィングやロンギヌスの圧に負けて、泣く泣くクレアを差し出す事も。

趣味は原作通りヨーグルト作り。なお、最近憧れのティルフィングの影響か、クレアの着せ替えに目覚めつつある模様（本人曰く「時々笑顔で手招きするピンクのシルエットが見える」そうな）。

フォルカス（Ｆｏｒｃａｓ）

ＣＶ：清都ありさ

性別：女性

身長：１６２

キラーズ：ソロモンの悪魔７２柱の一人、地獄の騎士『フォルカス』の槍

設定：

クレアの隊に所属する、『セブンスキラーズ』と呼ばれるキル姫達の1人。クレアからは時々『フォルさん』の愛称で呼ばれる（一回『フォルちゃん』と呼んで顔を真っ赤にして怒られたため）。

性格は一見、人当たりが悪いが真面目かつ健気なイイ子。同じ『セブンスキラーズ』の1人であるアスカロンとは非常に仲が良く、よく一緒に行動してる事が多い。

また、多くは語らず行動で示すタイプで、マスターであるクレアや仲間のために戦い、仲間を守るためなら自己犠牲も辞さない。が、アスカロンやクレアによく止められ足り心配されることも多く、最近は少しだが数が減ってきているとの事。

直属の先輩であるロンギヌスとは、一時期その臆病な性格と戦いを好まない面が気に障って衝突したことがあったものの、今では少しは認めてる部分もある様子。

趣味は原作通り、乗馬と考え事。前者に関してはたまにアスカロンを乗せて草原を駆ける彼女の姿を目撃した者がいるとかいないとか。

フライシュッツ（Ｆｒｅｉｓｃｈ・ｔｚ）

ＣＶ・大地葉

性別：女性

身長：１６６ｃｍ

キラーズ：『魔弾の射手』

設定：

クレアの隊に所属するキル姫の一人で、『エンシェントキラーズ』と呼ばれる特別なキル姫の一人。クレアからは『フライ姉（ねえ）』と呼ばれていて、本人も一人称が『お姉ちゃん』なため、気に入っている。

性格はとても陽気で天然。ハグが大好きでよくハグをするが、その特徴的なアレのせいでよくクレアが窒息しかけてたりする。また、『お姉ちゃん』であることを強調するが、余りお姉ちゃんらしいしっかりした感じがないためか、周りからよく「しっかりしなさい」といわれる事も。

また、彼女も自身のキラーズが持つ逸話から『戦いの中で大切なものを失う』という呪いがあり、その手の話題が出ると卑屈になってしまう危うい面もある。

現在は同じような悩みを持つティルフィングや隊の皆との触れ合い、そしてクレアとの日々の中である程度穏やかになっている。

クレアがＴ氏やＬ氏（名誉のｒｙ）から逃げ回るときに匿ってもらう対象の一人。ただし、その場合もれなくハグがつくため窒息しか

ける模様。
趣味は細かい所を歩くこと。ただ、一つの疑問として、あの体格で歩ける細かい所とはどういう道なのだろうか。非常に気になる。
シェキナー（Ｓｈｅｋｉｎａｈ）
ＣＶ．名塚佳織
性別：女性
身長：１６１ｃｍ
キラーズ：天使が携えると言われた『シェキナーの弓』
設定：
クレアの隊に所属するキル姫の一人。クレアからは『シェキさん』と呼ばれているが、あまり好きではない模様（曰く、「馬鹿にされてる気がしてイヤです」との事）。
性格は至って真面目。常に凛とした佇まいで規律ある態度のため、妙に迫力がある。戦闘においてはその正確無比な矢で相手を射抜き、また平時でも規律を重んじるその態度から頼りにされる事も多いが、半面規律を守らない者には容赦がない。また、過去の記憶により主イエスや天使に関わる武器の者との序列を重んじており、メギドやロンギヌスに敬意をはらって接している。ただし、ロンギヌスはかしずかれると非常に恐縮して涙目になるのだが、それを気にせず最敬礼する辺り、若干天然が入っているか、天性のＳっ気を持ってるのかもしれない。
趣味は原作通り派手なファッション。ただ、立ち絵などを見てる限りだと大抵服に関しては（学園服を除いて）煌びやかかつ露出が激しい物が多い印象を受けるのだが、その辺も彼女の趣味なのだろうか。
アロンダイト（Ａｒｏｕｎｄｉｇｈｔ）
ＣＶ．植田佳奈
性別：女性
身長：１５６ｃｍ
キラーズ：湖の騎士ランスロットの剣『アロンダイト』
設定：
クレアの隊に所属するキル姫の一人。クレアからは『アロさん』と

呼ばれているが、本人的には不評な模様。
性格は寡黙にして質実剛健。常日頃から節制を心がけ、日々の活動も、任務以外ではほとんどを鍛錬に充てている。その上、普段から必要以上の会話を嫌い、用がなければ接触を避け、決して己の主張をしないため、隊に所属した最初の頃は孤立する事も多かった。
現在ではクレア達との交流の甲斐もあって多少丸くなり、少しぐらいなら無駄話をするようになった（特に同じ剣の斬ル姫と会話することが多いとか）。が、節制癖と一日のほとんどを鍛錬に充てているは相変わらずの様で、「可愛いんだからもっと普通の女の子らしい活動してもいいのに」と、一部のキル姫達は内心心配してる模様。ただし、鍛錬後の昼食をこっそり自作してたりするなど、可愛い一面があったりするので、その辺の事情を知ってるクレアはそこまで心配はしてない。
趣味は原作通りダイエット。ただし、自分の誕生日等の特別な日には放り投げてる辺り融通は利くようだが、次の日に倍以上の鍛練を課してる所を見る為、あまり変わらない気もする。

プロローグ

「すみません、あなたは死んでしまいしました。」
「あ～、やっぱりっすか。」

暗闇の中で、光輝く神々しい女性にそう言われて、ようやく状況を飲み込む。

まぁ、たまたま外出してた帰りに子どもかばって2tトラックに轢かれたら、普通の人なんて簡単にぽっくり逝っちゃうもんだ。バイクから放り出されたりとか、そういう事故で無事なのは決闘者(デュエリスト)『遊戯王』においてデュエル（遊戯王でのカードバトル）を行う人達の名称。転じて遊戯王プレイヤーをこう呼ぶが、アニメの決闘者達は大抵体力オバケ。どれぐらいオバケかというと、かなり速度が出てるバイクから放り出されてもその後気合で動ける、普通死にそうな崖や高い所から落っこちても次話や次パートで普通に動けてる、高高度を飛行中の飛行機や飛行船の上で平気でデュエルし出すなど、枚挙に暇がない。そしてこれに対して疑問を零すと「だって当然だろ、決闘者なら。」で片付けられてしまう始末。「まぁ、決闘者なら仕方ないね」となったそこの貴方は毒されてます。かカードバトラー『バトルスピリッツ』、通称バトスピにおいて、バトスピでカードバトルを行う人達の名称。転じてバトスピプレイヤーの事をこう呼ぶ場合もあり。決闘者ほどではないが、軍隊や異種族とリアルファイトが出来たり、カードバトル専用の乗り物がぶっ壊れても本人は普通に生きてたりとこちらもかなりの体力オバケ。くらいだと相場は決まっている。って、それが分かってるならもっと体を鍛えてカードゲーマーを極めておくべきだったか。ちくせう。

「・・・随分、面白い思考をされてるんですね。」
「ん？　いやいや、オレなんてただのオタクですよ。面白いとは思えんのですけど。」
「いえいえ、死んだとわかったら、普通混乱するはずですよ。」

「あ～、まぁ元々こうやってしゃべったり、なんか感じられるなら問題ねぇって言う謎思考してるので。」
「自分で言いますか・・・。」

そう言って呆れる女性。まぁ、オレ本人が『謎思考』とか言ってる時点で末期な気もするが。
さて、察してる勘のいい読者もいるだろうけど、とりあえず今の状況を軽く説明しておこう。オレの名前は■■■■。名前を伏せてるが、まぁ本編中特殊な何かがあるわけじゃない。作者が適当すぎて単純に決まって無いだけだ。申し訳ない。
で、目の前のこの神々しい女性は、まぁいわゆる『女神』様だ。彼女は子供をかばって死んだオレを拾い上げてくれたそうだ。曰く、「無謀でも子どもを救おうとしたその心意気に惹かれた」との事。
まぁ、ここまで言えば、流石に皆分かると思うが、これは所謂テンプレな『転生』という、二次創作によくあるプロローグの展開だ。二次創作小説はオレもよく読んでたし、転生ものは憧れがないわけではないが、いざ、こういう状況になると気が竦むオレがいた。

「・・・にしても、『転生』か。」
「ん、どうしたんですか？」
「いえ、何というか・・・、その、オレなんかで良いんですか？　その、碌な事しない可能性とか、あるかもですよ？　オレ、そこまで聖人君子ってわけじゃないし。」
「フフッ、そんな風に自分を鑑みれる人でしたら、少なくとも私にとっては信頼するに値します。それに、これは私がしたいと思ったからやる事。あなたが第二の生で、どういう生活を送るのか、見届けたいのです。」
「・・・なるほど。」

自分がしたいと思ったから、か。う～ん、そう言われちゃあ、しょうがない。これはつまり、『自分がしたいと思った事だから、気にする

な。』という事なんだろうし。そういう好意を無下にするのは、流石に男が、何より人間性が廃るというものだろう。

「分かりました。ところで、何処に『転生』するのかとかって、決まってるんですか？」

「はい。あなたには、『天上世界ＦｇＧから配信中のスマホゲーム『ファントムオブキル』の世界観の一つ。ゲーム中では『天上編』と呼ばれるストーリーの世界観。神が統治する世界で人は住んでいるが、『異族』と呼ばれる怪物達の驚異に日々晒されている。主人公達が主に活動していく事になる世界でもあり、コラボイベント等も大抵この世界観で進んでいく。』という所に『転生』していただく事になっています。」

「『天上世界』・・・、それってもしかして、『斬ル姫（キラープリンセス）』ファントムオブキル』におけるユニット達の事。名前としては神話・伝承の武器の名前と同じという特徴があり、彼女達はその武器の様々な記憶を持っているという設定。様々な属性や使用武器、そして職種を持つ斬ル姫がおり、それらの組み合わせで様々な戦術を生み出す事が出来るのが特徴。』とかがいる？」

「はい。」

「って事は、『ファンキル『ファントムオブキル』の略称だが、公式でも専らこの呼ばれ方をされている。』の世界か。」

「はい、そういう事になります。」

『ファンキル』。

正式名称を、『ファントムオブキル』という、ソーシャルゲームの一つだ。

オレもストーリーに関してはそこまでちゃんと把握してるわけじゃないが、その美麗で個性豊かなキャラ達が好きで、いくつかのソシャゲと一緒にやり込んでいたので、よく覚えている。

「わかった。えっと、もうすぐに行く感じなのか？」

「えっ？　いえ、『転生』特有の『特典』というのがないわけではないですが。」
「あ～、そういやそんなのあったな。」

そういうのを読んでたくせに割りとアバウトな思考に、我ながら呆れてしまう。ただ、『特典』かぁ。そういうのを読んでる時は色々考えてた気がするが、いざ自分が当事者になると色々考えちゃうな。とはいえ、ファンキルの世界で下手な力を持ってても、あの世界の神様に目を付けられるのがオチだろうしなぁ。

「よし、決めた。見た目と声が女の子であれば、あとは何でもいいです。」
「・・・えっと、本当にそれだけでいいんですか？」
「はい。下手な力を持ってても、あっちじゃ都合役に立つどころか、デメリットになりかねないと思ったので。」
「・・それこそ、新たなキル姫になることだって、願えば可能ですが。」
「それじゃあ、最終的に彼女達と殺しあう事になっちゃうかもだし、そういうのは、ちょっとね。それに・・・。」
「それに？」
「きっと、大きな力を持っちゃったら、自分じゃなくなっちゃうと思うんです。だから、新しい容姿と声以外は、オレは特にいらない。強いて言えば、中身だけでもオレのまま、第二の生を謳歌したいんです。」

色々と矛盾した考えではあるが、これはオレの本心だ。彼女達キル姫に、戦いを押しつけるやり方は間違ってるとは思う。けど、同じものになったら、きっと最後には、刃を向けあう中になってしまうかもしれない。そんな事になれば、オレの心はきっと耐えきれない。それに、身の丈に合わない力を持ってしまったら、きっとオレは今までのオレを顧みる事すらしないかもしれない。それじゃ、きっとダメなんだと思う。

「・・・後悔は、しませんか？」
「それこそ、今更ですよ。後悔なんて、数え切れないくらい今までしてきた。だから、そんなオレのまま、あの世界に行ってみたい。そんなオレが、あそこでどんな事が出来るのか。」
「・・・分かりました。希望の見た目とかはありますか？」
「いえ、そちらに任せます。」
「分かりました。では、新たな生に対する祝福を。」

彼女がそういってこちらに手をかざすと、周りから眩い光が俺に集まってきて、オレを包みこんだ。反射的に目を覆うが、やがて光が収まり、視界が元に戻ってくると――

「・・・目線が、下がった？」
「はい。流石に、あなたの身長と同じで女の子は厳しいと感じたので。ご迷惑でしたか？」
「いえ、大丈夫です。慣れるのに時間かかるなって、思っただけなので。あっ、見た目確認したいんですけど、いいですか？」
「はい、構いませんよ。」

女神様はそう言うと何処からともなくたて鏡を出現させて、オレの前においてくれた。その鏡には、新しいオレの容姿である、『金髪に紅と蒼のオッドアイの少女』の姿があった。服装は『黒のシャツ』の上から『ベージュのジャケット』を来ており、下には『紺のジーンズ』と『黒のハイソックス』、『黒のローファー』を履いていた。

「ふむふむ、結構ボーイッシュな服装だけど、悪くはないですね。」
「それは良かったです。声はどうですか？」
「声？　あ～、あ～。んん”！　はい、いいと思います。」

何か、どっかで聞いたことある声、というか、自分が好きだった声優さんの声と同じ気がする、自分の新たな容姿から発せられる『声』を

分析しながら、そう返す。『女神』様はそれに快くうなずくと、また何処からともなく杖を取り出して、こちらに向けてきた。

「分かりました。では、これよりあちらの世界に、あなたを導きます。・・・心の準備はよろしいですか？」

「・・・はい、お願いします。それと・・・。」

「・・・？」

「自分のようなものを拾い上げて下さり、ありがとうございました！向こうでもしっかり、自分の生を全うさせて頂きます！」

オレはそう言って、彼女に向かってお辞儀をした。『捨てる神あれば拾う神あり』、なんて慣用句はよく聞くが、きっとこういう事を言うのだろう。オレはずっと、神様に見捨てられるぐらいどうしようもない存在だと思っていたが、こうして自分を見てくれる神もいるのだと知った。ならば、そんな神に恥じない生を送らねば、嘘であろう。

オレが姿勢をただすと、ポカンとした顔をした『女神』様がいた。あれ、オレなんか変なことしたか？　至って自然に礼を言っただけなんだが。彼女がポカンとしてる理由が分からず首をかしげていると、彼女は「フフフッ。」と微笑んで、こう言った。

「先程も言いましたが、これは私がやりたいからやった事です。お礼など、別に言わなくてもいいのに。」

「でも、やっぱりここまでやって頂いたんですから。せめて、お礼ぐらいは言わせて下さいよ。」

「・・・フフッ。やっぱり、あなたを拾い上げて正解でした。本当に、面白い方ですね。」

『女神』様はそう言って一頻り笑うと、改めて杖を構えた。

「・・・では、改めてあなたを『天上世界』へと送りますよ。いいですね？」

「分かりました。じゃあ、お願いします！」
「はい。あなたの新たな生に、幸多からんことを・・・。」

その言葉と共にまたオレは光に包まれた。ただ、さっきの光と違い、まるで暖かい何かに抱かれているような感覚を覚えながら、オレの意識は、安心したかのように自然と遠のいていった――。

序章：天上界にて

第1話：転生してからの日常

「・・・随分懐かしい夢を見たな。」

気だるげな眠気から、眼を覚ます。随分とまぁ、懐かしい夢を見たものだ。オレがこの世界、『天上世界』で生きていく事となった初めてのきっかけ。その原点を。

今のオレは、『クレア・バラージュ』という名前でこの世界を生きている。転生した当初は、(まぁ原作通りといえばそうなんだが)名前以外の記憶を失っていて『ファントムオブキル』のチュートリアル、及び『天上編』メインストーリー冒頭において、主人公は記憶を失っており、その記憶を取り戻す事も目的の一つとなっている・・・、のだが、イベントやコラボなどのイベントストーリーがメインストーリーと基本独立しており、かつメインストーリーを進めなくともキャラさえ育てて戦力が整っていれば、イベントに参加できてしまうため、メインストーリーを進めている間以外は割と形骸化している気がしなくもない。同じく記憶喪失だったとある斬ル姫と一緒に旅をする事となり、現在は『ラグナロク教会『ファントムオブキル』の主人公達が所属する組織。『教会』という名前だが、祀られているのは『天上世界』に存在する神様ではなく、『キル姫』達が持つキラーズ、つまり『武器』である。また、人々の中から『キル姫』を操るにたる『マスター』という存在を見出し、洗礼を与えるという重要な役目も持っている』所属のマスター『ファントムオブキル』における主人公の役割。前述の通り、ラグナロク教会からの洗礼を受けなければ正式なマスターとは認めてもらえず、主人公はそれを認めてもらえた数少ない存在ということになる。そして主人公は『キル姫』を率いる「マスター」として、『異族』と呼ばれる脅威から人々を守るのが使命となる。この辺り

は『ＦＧＯ』以外の『Ｆａｔｅ』シリーズのマスターと異なり、一人のマスターに何人ものキル姫がついているのは割と当たり前である。また、戦場においてキル姫達を指揮するその姿から、『ファントムオブキル』におけるマスターは、別名『奏官』と呼ばれる。として、仲間のキル姫達と共に、日夜任務に励んでいる。

「あっ、ようやく起きられましたかマスター？」

「ん？　あぁ、ティルか。」

寝ていたオレが起きたのに気づいて、桃色ロングヘアーの赤目の少女が話しかけてきた。彼女が、さっき言っていた初めて出会ったキル姫、ティルフィング。オレは『ティル』って愛称で呼んでいる。

彼女もまた、オレと出会った時は記憶喪失で、自分がキル姫で『ティルフィング』という名前だという事と、この世界の事についてしか覚えていなかったぐらいだ。

今では、オレも彼女もある程度記憶を取り戻しているものの、まだ完全ではないところが歯がゆい。まぁ、そこに関しては二人とも、『ゆっくり取り戻していく』という結論に達しているため、特に取り立てて気にしているというわけでもない。

ちなみにティルは、オレが『転生者』という異分子である事を知る数少ない人物の一人だ。なので、その手の話を相談できるっていう点でも、彼女に対する信頼は一番大きい。

まぁ、そんな説明はさておき、今はもうすぐお昼時といった所。オレ達は今、教会から依頼された事務作業をしており、教会への報告書や人事案件、承認事項やその他諸々にサインやらなんやらをしていた所だ。幸い、書類が汚れたりする事はなかったようだが、簡単に状況

を整理すれば、今の今まで寝てサボっていたという事になるだろう。

「・・・って、オレどれくらい寝てた？」

「ざっと３０分ほど、といったところでしょうか。」

「マジか・・・。ヤベェ、事務仕事中に寝すぎたな。相方が『アロさん』や『シェキさん』じゃなくて助かった。」

「まぁ、あの二人なら寝てたら即座に叩き起こしそうですけど。」

「アハハ、違いない・・・。」

あの二人は割とこういうの厳しいからなぁ。まぁ、アロさんはそもそもキラーズの性質上、武人然としてるから、あんまり事務作業とかに突き合わせた事は無いけど。

ちなみに、『アロさん』っていうのは『アロンダイト』さん、『シェキさん』は『シェキナー』さんっていうキル姫の事だ。どっちも規律や規則といったものには厳しく、さっきみたいに寝てたらまず間違いなく説教コースはおそらく免れられない。ただこの二人、プライベートにおいてはある一点がどうにもそりが合わないようで、ごくたまに揉めてるのを見かける事があるそうな。プライベートだとだいたいオレはティルかもう一人と一緒だからか、そういう話を聞くとちょっと見てみたいと思ってしまう。まぁ、俗にいう恐いもの見たさというやつだが。

「さてっと。じゃあキリのいいところまでやったら、一旦昼休憩入れるか。」

「はい。」

それからオレは机での寝起きで凝り固まった体を解した後、ティルと一緒に本日の事務仕事をある程度片づけ、昼休憩のために食堂へと移動したのだった。

ティルと一緒に食堂へ行くと、昼休憩に来てたキル姫や教会の人達がたくさんいた。二人で座れる場所を探していると、ぽわ～っとした陽気な声が聞こえてきた。

「あっ、マスターくん！　それにティルフィングちゃんも！　二人とも、今からお昼休憩？」

「おぉ、フライ姉。まぁそんなところかな？」

声をかけてきた彼女は『フライシュッツ』。『魔弾の射手デア・フライシュッツ』と呼ばれる凄腕のガンナーで、『エンシェントキラーズ『ファントムオブキル』における斬ル姫達のグループの一つ。天上世界に住まう神々に反逆した結果、封印されてしまった８人の斬ル姫達がこのグループに所属している。また、ストーリー上の設定となるが、リーダーの『ラグナロク』以外はそれぞれ７つの徳を司っており、それぞれ『勇気・不屈の精神』『希望』『正義』『節制』『愛』『知恵・思慮』『信仰』を司っている（フライシュッツの司っている徳は『信仰』）。

また、ラグナロクは『革命』を司っており、神に反旗を翻したのもおそらくこれが由来。』と呼ばれるキル姫の一人だ。物騒な二つ名とか、とんでもない過去話が紛れてるが、本人は普段陽気でぽわ～っとしていて、天然な感じだ。正直な話、ときどき見てて危なっかしい時があるのだが、やる時はきっちりやってくれるため、うちの隊でも頼りになる仲間の一人だ。

ちなみに、『フライ姉』というのはオレが呼んでる彼女の愛称で、理由は一人称が『お姉ちゃん』だからなのだが、どうにもお姉ちゃんしてる時があまりないらしい。ま、まぁ姉がぽわ～っとしてるから、それを（義理だが）妹（？）であるオレや、本来の彼女の妹がフォローしてると考えれば、まぁ間違っては無いのだろう。

そんな彼女は、オレとティルが席探し中だと知ると、自分の席に俺たちを招き寄せた。

「ここ、ちょうど席空いてるよ～。ロンギヌスちゃんやクーちゃん、レーヴァちゃんも来てるけど、いい？」

「オレは別にいいよ。ティルは？」

「私も、マスターがいいのなら構いません。」

「そっか。じゃあフライ姉、お言葉に甘えさせてもらうな。」

「うん♪　皆もきっと喜ぶと思うよ～。」

フライ姉に招かれるまま席へ行くと、そこにはフライ姉の他にも、事前に聞いてた3人――少し横にはねた茶髪ショートの優しげな『ロンちゃん』こと『ロンギヌス』、銀髪ロングの気だるげな『レヴァさん』

こと『レーヴァテイン』、ピンク髪ツインテールの元気溌剌な『クーゲル』こと『フライクーゲル』――もいた。ロンちゃんはこちらを見ると顔をパァッと輝かせ、クーゲルは「あっ、マスター！」と元気よく声をかけてきた。唯一、レヴァさんだけはこちらに気付いてないのか、黙々とご飯を食べていた。

「よっ、３人とも。悪いけど、オレとティルも相席させてもらうな。」

「失礼しますね。」

「マスター、ティルフィングさん。こんにちは。」

「Ｈｅｙ、マスター！　ティルフィング！『ヘァピィ☆『ファントムオブキル』のキャラの一人、フライクーゲルの口癖。事あるごとに割といってるため、彼女を象徴する台詞となっている。また、発音にも拘りがあるようで、とあるストーリーで『ハッピー』と発音した斬ル姫に『ヘァピィ☆』というように強要するほど。中の人の演技も相まって凄く癖になる台詞でもある。』してる？」

「アハハ、まぁそれなりにだな。」

「相変わらず、貴女達姉妹作中明確に姉妹をしているわけではないが、この二人は元となったキラーズが同じためか、公式でも姉妹扱いされる事が多い。は元気ですよね。」

「アハハ～、褒めても何も出ないよ～。」

「で、ティルフィングは『ヘァピィ☆』してる？」

「・・・まぁ、私もそれなりに、ですね／／／」

クーゲルの質問に、照れながらも返事するティル。ティルは割りと、こういうノリの相手には振り回されてる事が多い気がする。まぁ、普段は比較的落ち着いてて物静かなティルにとって、基本テンション明るめなフライ姉達『魔弾姉妹』は苦手ではないものの、未だに慣れないところがあるのかもしれないな。ってあれ？　ロンちゃんも割とこういうノリ、ティルとは違う意味で苦手だった気がするが。

「そういえば、ロンちゃんやその～、そこで飯食いつづけてるレヴァさんは何でフライ姉達と一緒に？」

「あ～、実はですね――」

ロンちゃんはオレとティルに、ここまでの経緯を教えてくれた。どうも、最初はロンちゃんとレヴァさんだけだったのだが、途中からクーゲルがフライ姉と一緒にここに来たらしく、席も二人で使うにはちょっと広かったため、一緒に食べ始めたとの事。って事はフライ姉・・・、最初からこの席にいたわけじゃなかったのか。ありゃ最初からここにいた感あったが、そういう訳じゃなかったのか。まぁ、別にそれをとやかくは言わんが。

「なるほどな。」

「じゃあ、レーヴァテインはその時から？」

「あ～、はい。おそらく、その時からずっとこんな調子かと・・・。」

「・・・アレ？　マスターとティルフィングじゃん。アンタ達もこっちに来たの？」

オレ達がロンちゃんと話していると、ようやくこちらに気づいたのか、レヴァさんが昼飯をかき込んでいた手を止め、こちらを気だるそうに見てきた。

「おぉ、悪いなレヴァさん。ちょっと今、席があんまなくてな。」

「申し訳ないけど、相席させてもらってるわ。」

「ふ～ん。まぁ、別にいいよ。気にしないし。ってあれ？　食器ないけど、もう食べた感じ？」

「「えっ？」」

レヴァさんの不意の質問に、ふと自分達の目の前を見る。そして、二人して席を確保する事ばかり考えていたため、昼食を買うのを忘れていたのに気づいた。そう言えば、なんか足りない気はしていたのだが、よりによって忘れちゃいけないのを忘れていたとは・・・。

「あっ、ヤッベ！　そういや買い忘れてたわ！」

「そう言えば、どちらも席を確保する事に夢中でしたね。」

「だな。そういう訳で悪い、フライ姉！　ちょっとティルと一緒に飯

買ってくるから！」

「すぐ戻ってきます。では！」

「は～い、いってらっしゃ～い。」

慌てて飯を買いに行くオレ達。その後ろからゆるーい声で送り出すフライ姉。そう言えば、姉妹でも口調は全然違うよなと、少しどうでもいい事を考えながら。

余談だが、喋りながら食べてたせいか昼の仕事が少しずれこんだのだが、ロンちゃんも手伝ってくれたおかげで、今日中の事務仕事は何とかギリギリ間に合った。

その日の夕方、オレは今日の事務仕事を終え、自室にて休憩していた・・・、のだが。

「～～～♪」

「・・・あの～、ロンちゃん？　オレ、いつまでこの状態なのかな？」

「え～、いいじゃないですか。最近ティルフィングさんばかり構ってもらってて、私だって、嫉妬ぐらいしてるんですよ？」

そういって、オレを膝枕して頭をなでるロンちゃん。最初のころはこんな事をするだけで、互いにビクビクしてたというのに、随分と慣れたものだよな。というかロンちゃん、『嫉妬』は確か、君のブラックキラーズ『ファントムオブキル』におけるグループの一つ。『黒奏官』と呼ばれるマスターに使える『ファーストキラーズ』達の事で、通常のキラープリンセスたちとはその能力は一線を画している。その強さはたった一人のブラックキラーズに複数のキラープリンセスが地形を利用したりして有利な条件で戦いを挑んだとしても歯牙にもかけないほどで、実際専用のサイドストーリーでは、その圧倒的な力を持って主人公と共にいるファーストキラーズ達を何度も窮地に追い込んでいる。また、このグループに属するキラーズはそれぞれ『7つの大罪』と同じ名前の『業』を背負わされているため、元の『ファーストキラーズ』達とは性格が著しく異なっているのも特徴の一つとなっている。　ちなみに『ファーストキラーズ』というのは、『ファントムオブキル』におけるグループの一つ。最初に生まれた7人の斬ル姫達の事を指す。リーダーはティルフィング。が司る『業』だったよね？　まさか、元々そういう気質はあったってことなのか？　っていうか、ロンちゃんって確かキリスト教（正確に言うとその経典の聖書）関係の民話・神話出身って事もあって、一応敬虔なキリスト教信者だったよな？　こういうのって・・・、う～ん、どうなんだろう。生前、無神論者だったがゆえに、その辺わからんのがツラい。

（まぁ、本人は楽しそうだし、別にいいか。）

「どうしましたマスター？」

「ん？　あ～いや、楽しそうだなぁって思っただけだから、気にしないで。」

「・・・マスターは、楽しくないですか？」

「ん～や、最初は気恥ずかしかったけど、慣れちゃえばそうでもないかな。こういう時間も、割りと好きっちゃ好きだし。」

「マスター・・・／／／」

「なるほど。じゃあ、マスターも着せ替えには慣れてるはずですし、今からどうですか？」

「ん～、そうだなぁ・・・、って、えっ？」

あれ？　何か今、この部屋から聞こえるはずのない声が聞こえた気が・・・。そう思って怪訝な表情をして扉の方に顔を向けると、そこには、それはそれは良い笑顔をしたティルが、手に（どこで買って来たかわからないが）少し露出のキツそうな服を持ってこちらを見ていた。

「・・・あの～、ティルさん？　その手に持ってるのは・・・？」

「フフフ、マスターなら、言わなくてもわかりますよね？」

・・・マズい。何がマズいって、このままだと、俺の貞操が色々とヤバい。何よりこの状況が、マズさに拍車をかけてやがる。今オレはロンちゃんに膝枕されてる状態。その上、目の前にはティル。いや、今オレの前にいるのはティルじゃない。クール系着せ替え魔人『T氏』だ！　というか、このままだとロンちゃんまでファンシー系魔人『L氏』になるかもしれない。そうなったら、一巻の終わりだ・・・。

「・・・・・・あ～、ごめん二人とも。オレちょっと緊急の用事思い出したから、この辺で――」

「――フフッ。逃　が　し　ま　せ　ん　よ　？」

「――そうですよ、マ　ス　タ　ー。」

「・・・アハハ、デスヨネー・・・・・・・・。」

まぁ、普段から『異族』なんていう奴らとずっと戦ってる二人のキル姫からあの体勢で逃げられる訳もなく・・・。

――こうして、オレの記憶にまた一つ、新たな『着せ替え』という名の黒歴史が刻まれる事となった。毎度思うんだが、オレを着せ替えして何が楽しいのだろうか、あの二人は・・・。と、後日疑問を『T氏』のもう一人の（というか原作的には本来の）着せ替え対象である『D氏』こと妖精の『デュリン『ファントムオブキル』におけるナビゲーターの一人。ティルフィングにひっついてる妖精なのだが、小さい系の発言に対してはすぐキレるどこかの豆粒錬金術師と似たような特徴を（ダレガミジンコゾウリムシドチビカー！――――（以後血で読めなくなってる為カット）真面目な解説をすると、ティルフィングと行動を共にしている妖精で、チョコレートが大好き。第２章『失われし千年王国編』が始まる前まではログボ受け渡しの担当もやっていた。

第2章からは違うキャラに変わったものの、ローディング中の右下には映っているので、公式でもマスコットキャラとしての地位を確立している模様。』に聴いてみると――

「ん～、何かあの子達の琴線に触れるものがあったんじゃないの？」

「琴線に？」

「えぇ。アタシもティルフィングに一回聞いてみた事があるけど、そしたらあの子、『何というか、着せ替えし甲斐があるというか・・・。』とか言うのよ？」

「着せ替えし甲斐がある、ねぇ。ん～、よくわからん。」

まぁ、人の趣味にとやかくいうのもアレだし、別にあの二人も、本当に嫌がるラインまでは踏み込んでこない。その上仕事もちゃんとやってるし、それに公私共に頼りになる存在だ。それに、ティルはともかくロンちゃんは、本当は心の優しい、戦う事すら嫌いな子だ。こういう時にガス抜きをさせてやらなきゃ、やってられないだろう。ならまぁ、せめてあぁいう時だけでも、好きにさせてもいいかと思った――。

「――なら、分かるまで付き合いますよ？　マスター。デュリン。」

「――マスターの方は、私もお供しますね。ティルフィングさん。」

「「・・・ゑ？」」

――翌日、ある一室から悲鳴か何か分からない可愛らしい声が二つ、響いたらしいが、それはまた、別の話。

第2話：真夏の休暇

「「海だぁぁぁぁぁぁ（だよ～）!!!」」
「うるさいですよ（・・・うっさい）！」
「「ショボーン・・・。」」
「ア、アハハ・・・。」
「・・・ハァ～。」

どうも皆さん、ティルフィングです。今日はマスターや他のキル姫達と一緒に、ラグーナ島『ファントムオブキル』における舞台の一つ。『海上編』と呼ばれる水着の斬ル姫達が繰り広げるストーリーの舞台で、常に常夏の空間となっているという赤道直下のような世界なのだが、この小説においては後者の特徴のみを採用した別世界という扱いにしている。に休暇で来ています。えっ、前回からどれぐらい経ってるか、ですか？　・・・すみません、作者の描写不足で。ただ、前回の話からは、そこまで月日は経ってません。

ちなみに私達がここへ来た理由ですが、マスター曰く、

「今年ももうそろそろここへのゲートが閉じちまうだろうから、最後の記念にどうかと思ってな。」

との事。

年中常夏なこのラグーナ島のあるこの『海上界『ファントムオブキル』のストーリーの一つ、『海上編』の舞台となる世界観。マナが空気中ではなく水中に含まれており、この世界における斬ル姫達はそのマナが無いと生きられないため、３つの国に分かれて奪い合いをする、という感じになっている。なお、現在は国自体は残っているものの、『マスター』と呼ばれる存在のおかげで減っていったマナが元に戻ったようで、仲良く過ごしているとの事。なお、この小説においてはこの世界観はあまり関係なく、単純に『ラグーナ島』という常夏の島がある空間という意味合い』とでも呼べるこの場所への入り口である

ゲートは、一年中開いてはいませんようはイベント限定期間の事。ゲーム中でもこの『海上編』に関してはいつでも出来る訳ではなく、特定の期間の間のみプレイできるため、こういう形なのではないかと推測している。。一年に一定の期間、読者の方々でいうところの『夏』と呼ばれる期間の間だけ、この特別な世界と私達の住む『天上界』がゲートによって繋がり、私達はその期間中、ここにいる海上界特化型の異族の討伐や、普段なかなか出来ない「海辺でのデート」を楽しんだりします。まぁ、当然それだけなら、異族討伐はともかく、ここへ来る理由は(実益的な意味では)さほどありません。ですがこの場所では、マスターと私達キル姫の『親愛度』が最高潮に達した時に発現する特別なスキル、通称『トラストスキル『ファントムオブキル』において、海上編限定の斬ル姫達の『親愛度』が１００％以上溜まると解放される特殊スキル。『付帯スキル』と呼ばれる付け替え可能なスキルとなっており、複数の斬ル姫達の親愛度を上げて１００％にして、それらのトラストスキルを付け替えたりすることも出来る。が、スキルによっては特定の武器持ちや属性のキャラ、はては開放したキャラ限定で特別な効果を発揮するものなどもある為、付け替えをする際は注意が必要である。』と呼ばれるスキルを発現させるのに最適な環境との事なので、度々休暇を取ったり、異族の討伐任務を積極的に受けて訪れるマスター達がいるそうです。まぁ、実利や実益ばかり考えてるマスターばかりではないので、私達のマスターの様に、純粋にキル姫達との思い出を作りたいという方もいますね。

ただ、ここを訪れる際に一つ問題があるとすれば、ドレスコードとして『水着』の着用が義務付けられている、といったところでしょうか『ファントムオブキル』の『海上編』の、特にストーリーにおいて重要な事。このストーリーを進める際は、『海上編』のキャラのみしか編成できないため、強力な斬ル姫を所持していたとしても、それらが海上編のキャラでなければそもそも使用できないという、ある意味不便な特徴を抱えている。一応、海上編を最初に始めた際に一人、現在（２０１９年８月３日）の時点だと海上編の無料ガチャが１回引けるため、最低限の戦力を確保する事は出来るのはある意味幸いではあ

る。。普段からマスターとよく着せ替え(一方的)をしてる私やロンギヌス、それと楽しい事が好きなフライシュッツとフライクーゲルの『魔弾姉妹』達はともかく、普段から鍛錬ばかりで無駄な事は極力しないアロンダイトや、任務以外では割と寝てる事が多いレーヴァテイン等の一部のキル姫達はそもそも水着すら持っていなかったりして、最初来る時は準備が大変でした。先ほど挙げた二人は特に。

まぁ、そんな二人も今は周りと馴染んで一緒に過ごしているので、良い傾向だと思います。はしゃぎがちなマスターや『魔弾姉妹』のストッパーともなってくれている(本人達としては渋々)ので、私としても少し助かってたりしますね。どうも、あぁいう空気に混ざって止めるのは苦手なので。

さて、みんな思い思いにここでの一時を楽しみ始めてますし、これからどうしましょうか。マスターは・・・、あ~、フライシュッツ達と色々はしゃいでますね。日焼けが大丈夫か気になりますが。私達のマスター、『クレア・バラージュ』は、肌が弱いようで日焼けすると赤く腫れてしまうようで、ひどい時は服を着る時でも痛みがはしるそうで、職務にも影響が出かねないですから。・・・ま、まぁ。そうなったら仕方ないですが、私が、看病しても・・・、って、何を考えてるのよ私は!?///

・・・いけないいけない。マスターについて考えていると、どうも変になってしまう自分がいます。確かに、付き合いも長いですし、彼の『特殊な事情』を知っているので、彼の事を意識してしまうのは分かるのですが・・・。

「ティルフィングさん? ティルフィングさ~ん!」

「ん? あぁ、『アスカロン』ですか。どうしましたか?」

マスターについて色々と考えていると、私達『ファーストキラーズ』の後輩にあたる『セブンスキラーズ『ファントムオブキル』におけるグループの一つ。ファーストキラーズを超えることを宿命付けられていた第七世代目の斬ル姫の事・・・、なのだが、実際のところはメ

ンバーによって関係性はまちまちで、ライバル視してる者もいれば頼れる先輩として憧れているものいたりするので、仲のいい先輩後輩のような関係に落ち着いている気がしなくもない。』の一人で、私の後輩、『アスカロン』が話しかけてきました。確か、先ほどまで同じ『セブンスキラーズ』の一人で、ロンギヌスの後輩の『フォルカス』達と一緒に、波打ち際ではしゃいでいたはずですが。

「いえ、一人でずっと黙り込んで、マスターの方を見てるだけだったので、どうしたのかなと思って。」
「い、いえ別に・・・。特に、何かある訳ではないんですけど、ね。」
「？　そうなんですか？」
「え、ええ。」

うぅ、アスカロンの純粋な（疑問の）眼差しが、地味に心にきますね。彼女、妙に純粋なところがあるせいか、私とマスターの関係を『長年連れだったパートナー』とか考えてそうなんですよね。まぁ、フライシュッツ達のように、彼女達後輩の前でおおっぴらに大好きオーラを振り撒いてる訳ではないので、分からないのも仕方ないですが・・・、なんだか少し、複雑な気分です。
そう考えていると、アスカロンが「ん～・・・。」と唸った後、ポンっと手を叩くと良いことを思いついたといった表情でこう言ってきました。

「よし、じゃあティルフィングさん！」
「はい？」
「一緒にマスターの所に行きましょう！　というか、一緒にデートしに行きましょうよ！」
「え、ええ!?」

いやいや、ちょっと待って下さいよ!?　なぜ急にそんな話になったんですか?!　そんな話の流れでしたっけ?!　マスターの方をずっと

見て、どうしたのかって話しかしてなかったはずですが。それに、今はフライシュッツ達と一緒にいるんですから、彼女達からマスターを、私（やアスカロン）の勝手で引きはがすのもどうかと思いますし・・・。

「大丈夫です！　せっかくマスターがラグーナ島に連れてきてくれたんですから、沢山思い出を作らないと損ですよ！　ほら、そうと決まれば!!　行きましょう、ティルフィングさん!!」
「えっ、ちょっと!?　アスカロン?!」

アスカロンの急な提案にどぎまぎしながらそう考えている間にも、思い立ったが吉日と言わんばかりに自己完結させ、彼女は私の腕を掴み、マスターの所へと引っ張っていきました。

「アハハハハ!!　ハチの巣ショウターイム!!」
「『ハチの巣ショウターイム!!』、じゃねぇよバカ!!　なにただの水かけ合戦で本気になって、って危ねっ!?」
「アハハ！　油断大敵だよ～、マスタ～くん！」
「アンタら、姉妹揃って容赦なさすぎませんかねぇ!?」

ラグーナ島に来てから早1時間が過ぎようとしてる頃、オレは今フライ姉とクーゲルの『魔弾姉妹』と一緒に『本気（キル姫基準）』の水かけ合戦をしていた。いや、かれこれこの波打ち際でずっとこうやってはしゃいでるわけだけど、正直体力的にキツイ！　しかもキル姫基準のガチだから、飛んでくる水の勢いがすごいのなんの・・・。最初はただ水を掛け合ってただけだったのに、どうしてこうなった・・・！

その上、さっきちらっと見えた『アッスー』ことアスカロンみたいに他の姫と戯れてる娘とか、はたまたレーヴァみたいに（アイツの場

合めんどいのもあるだろうが）巻き添えを食らいたくないからか遠巻きにしか見てない娘とか、ロンちゃんみたいに街に買い物に出かけた子（なんかさっきデュリンと街の方に行くのが見えた）とか・・・、つまり味方が現状いない。まぁ、流石に止め際は分かってると思いたいが。

「あれぇ？　マスタ～くんってば、もうバテちゃった感じ～？」
「ハァ、ハァ・・・、あのなぁ。キル姫のマスターっても、あくまでオレは普通の人間だぞ。むしろ、ここまでそっちのペースについてこれたのは奇跡だからな。」
「アハハ!!　まぁ、マスターのフィジカルは、ティルフィングやロンギヌスとのチェイスで随分ビルドアップされてるはずだからネ～!!　これぐらいマージン（英語で『ｍａｒｇｉｎ』、余裕の意）デショ!!」
「そんなので鍛えられたっていうのも若干いやだな・・・。というか、ただ地上を走るのと、波打ち際とはいえ水辺を動き回るのじゃ、体力の使い方がダンチだからな!?　余裕じゃねえよ?!」

　そんな風に体力がギリギリながらも何とか二人と会話してると、砂浜の方から「マスター!!」と叫ぶ声が聞こえ、そちらを見ると思いっきり手を振ってこっちへ向かってくるアッスーがいた。その隣にはティルもいて、何でか知らないが顔を赤らめて恥ずかしそうにしていた。何があったし？　と思うと、その答えは存外早く分かった。

「今からティルフィングさんと一緒に、街の方にデートに行こうと思うんですけど、マスターも一緒にどうですか!!」
「ちょ、ちょっとアスカロン!!　私はまだ行くとは・・・。」
「えっ、行かないんですか？」
「うっ・・・。・・・こういう時のあなた、後輩のくせにホント意地悪よね。」
「？」
「ふむ・・・。」

街の方に『デート』…。あ～、なるほどな。それでさっきからティルが顔を赤らめて恥ずかしがってるのか。オレも別に、鈍感ってわけじゃない。ティルがこっちに、好意的な感情を向けてるのくらいは知ってる。が、割と奥手な部分があるのと、性格的に結構職務に真面目なのもあって、プライベート以外じゃなかなかそういった所を見せないんだよな。まぁ、フライ姉みたいにところかまわずハグ（という名の凶器（意味新）タックル）をしてきたりする方がいいというわけでもないが、もうちょっと自分の気持ちに正直になってもいいとは思うんだよ、オレは。

にしても『デート』か。ちょっと流石に波打ち際での水遊びにも疲れてきてた所に、このお誘いは良いタイミングだ。今のこの時間を楽しんでるフライ姉達には悪いが、これは休憩できるいい口実になる。何も水辺で遊ぶだけが、ラグーナ島の楽しみでもねぇしな。まぁ、かといって放置すると後々よくないだろうし、さてどうしたものかと考えていると、フライ姉がこっちにハグしてきながら口を開いた。

「わぁ～、デートかぁ～！　ねぇマスタ～くん！　一緒に行こうよ～!!」

「ベリイグ～ッド!!　マスター、私達もトゥギャザーしていいよネ!!」

「・・・ハハッ、そうだな。」

そうだ、この二人はこういう性格だったな。楽しそうな事には、積極的に自分から頭突っ込んでいくというか。『フライ（ｆｌｅｉ）』、ドイツ語で『自由な』という意味を持つこの単語を名前に含んでるだけあって、相手がよっぽど嫌がってるとかでもない限りは、わりとその場のノリで動いてるのがこの『魔弾姉妹』という二人だ。

「すまん、アッスー！　ティル！　フライ姉達も一緒に連れてってもいいか～!?」

「いいですよ～！　人数が多い方が楽しいですし～！　ティルフィン

グさんもいいですよね？」
「えっ？　ええ、構わないけど。」
「ティルフィングさんも大丈夫ですって～!!」

アスカロンがティルに確認すると、どうやらオッケーが出た様だ。まぁ、たぶんあの素直じゃないティルの事だし、案外内心は二人きりの方が良かったな～・・・、とか、オレと一緒に入れる時間が減る、とか考えてそうだけど。すまんな、ティル。今度時間があったら、その時は必ず二人きりで行くって約束するから。今回はちょっと、我慢してくれ。

とまぁ、そんな気楽に考えてた時間がオレにもありました・・・。何で過去系かって？　それはな・・・。

「フ、フライシュッッ・・・！　その、マスターと、その・・・。ベタ付き過ぎな気が、するのですが・・・！」
「えぇ～、お姉ちゃんはマスターくんが好き～って気持ちを、真っすぐ伝えてるだけだよ～？」
「ティルフィング、もしかしてジェラシー感じちゃってる～？」
「そ、そういうわけでは!?　だいたい、そんなベタベタしてたら、マスターが歩きにくいでしょう!!」
「あわわわわわわわ～・・・。」
「・・・・・・（・・・どうしてこうなった）。」

オレは今、ティル達と一緒にラグーナ島の街の中を散策している。それはまだよかった。ただ、散策直後からフライ姉がやたらとオレの左腕にベッタリくっついて歩いており（当然大きな『アソコ』を当てながら）、それを見たティルは最初こそ涼しそうな顔をしていたが、

段々耐えきれなくなったのか嫉妬半分真面目半分で説教しており、そんな様子をクーゲルが茶かして余計に火に油を注ぎ、それを見たアッスーがどうしようとあわあわしてる状態だ。

・・・まぁ、正直オレもフライ姉がここまでベッタベタにくっついてくるとは思わなかった。多少の距離感は掴んでたつもりだったんだがなぁ。とはいえ、このままにしておいたらマジでティルが機嫌を損ねちまう。それは俺の本意ではない。・・・こうなったら仕方無い。今のティルのメンタル的にあまりよくはないかもだが、まぁやらないよりはマシだろう。

そう決意したオレは、フライ姉に抱き疲れてない右腕の方をティルに差し出してこう言った。

「・・・その、ティル。」

「っ、な、何ですかマスター？」

「その、さ。お前が良けりゃ、右腕（こっち）の方に抱きついても、いいぞ？」

「っ!?　い、いえお構いなく!!　私は別に、そういう事をしたい訳ではなくて、その・・・。」

ティルはそう言って、顔をそむけてしまう。まぁ、ここで即決してしまったら自分らしくないっていうのと、後輩であるアッスーの目があるのが、恐らくそんな行動に走らせてるんだろうけど。・・・後々めんどくさくなりそうだが、ここはオレが度胸を見せなきゃならんな。

「・・・なぁティル。」

「・・・何ですか？」

「その、さ。オレはティルと、こういう事、してみたいなって。だから、さ。その・・・、ダメか？」

「・・・・・・、そう言われては、断れないじゃないですか。もう／／／」

「アハハ・・・。で、どうなんだ？」

「・・・しょうがないですね。今回だけ、ですよ？」

そういうとティルは、オレの手を恐る恐る握り、ゆっくりとこっちに身を委ねてきた。フライ姉と比べたら、そんなに大きく主張して来ない彼女の胸だが、何故かオレにとってはとても好ましいものに感じた。いつまでもこうして、ずっと繋いでいたい。そう思える程に、オレはきっと彼女の事が好きなのだろう。・・・いつか、異族達との戦いが終わる時が来たら、その時には、この気持ちを打ち明けたいが――

――と、そんなことを考えていると、左腕を思いっきりグイッと引っ張られた。思わず振り向くと、そこにはプンスカと頬を膨らませて、いかにも「嫉妬してます!!」と言わんばかりの顔をしたフライ姉がこっちを睨んでいた。後ろにはニヤニヤしながら爆笑とかいう滅茶苦茶器用な事をしてるクーゲルや、余計にあわあわしてるアッスーが見えてる辺り、どうもティルと二人だけの世界に入り出してから、どうもずっとこの調子だったようだ。

「・・・あ、あの～、フライ姉さま？　そんなにプンスカ怒って、どうしました？」

「ム～、マスターくん?!　それ分かって聞いてるの～!?　別にくっつくなとは言わないけどさ～、お姉ちゃん達がいるにもかかわらず、二人だけの世界に入りこむのはどうかなって思うんだけど～!?」

「ウッ、す、すまん・・・。以後気を付ける。」

「ム～・・・。じゃあ罰として!!　今日はお姉ちゃんと、お姉ちゃんの部屋で一緒に寝る事!!　いい?!」

「ウエェッ!?」

ちょっと待って!!　今『一緒に寝る』って言ったか?!　フライ姉、それ人によっちゃ『罰』じゃなくてご褒美になる気がするんだが!?　ん、オレか？　その・・・、言いたい事は色々あるが・・・。・・・とり

あえず、ノーコメントで!!

「なっ!? ちょっと待ちなさいフライシュッツ!! そんな我が儘、許しませんよ!!」

・・・まぁ、さっきのはともかく。当然フライ姉の発言にティルは猛反発。まぁ、記憶を失ってからの付き合い故か、お恥ずかしながらどうも、ティル抜きでの生活っていうのが出来ないみたいでな。デュリンの監視つきの元、同じ部屋で寝させてもらってるのだ（当然ベットは違うのにした。それぐらいの甲斐性はある）。ただ、たまに嫉妬したロンちゃんとかがオレのベッドに忍び込んで寝てる事もあるので、割とあの部屋で寝るようになってからは、独り占めっていうのは少ない気もしなくもないが。

「先に良い雰囲気作り出したのはティルフィングちゃんじゃ～ん!!
それに、普段からマスターくんを独り占めにしてるんだから、今日くらいいいでしょ～!?」
「ひ、独り占めだなんて!? 人聞きの悪い事言わないでください!!
だいたい、あなたの部屋ベッド一つしかないじゃない！ マスターをどこに寝かせるつもりですか!!」
「えっ、それは当然、ねぇ～・・・。」
「～～～!? そんなの、なおさら認められません!! 私だって、そんなのした事ないのに!!」
「それはティルフィングちゃんがただヒヨってるだけでしょ～!?」
「っ、何ですってー!?」「何よ～!?」

あ～、めっちゃヒートアップしちまってる・・・。どうする? さすがにそろそろ止めないとヤバいよな、これ? アッスーはもうあわあわしすぎて涙目になってるし、クーゲルはもう・・・、何かあんまり役に立ちそうにないし。ハァ～、こんな時に都合のいいタイミングで誰か、出来ればロンちゃんかデュリンが来てくれれば――

「二人とも、何こんなところで騒いでんのよ!!　迷惑でしょ!!」「グエッ!?」

――救世主キター!!

「アンタもアンタよ!!　マスターでしょ!?　何で止め――」

――ないのよ、と、いつもの説教モードでデュリンは怒ろうとした。が、突如街の中から平時は聞こえるはずのない音達が、オレ達の意識をオフから抜け出させたのだった。

――聞こえた音は、破壊音と、悲鳴だった。

第3話：異世界からの襲撃（前篇）

――クレア達が街へ来る少し前。
ラグーナ島内陸部にある森林地帯。その奥にある滝の近くに、一人のフードを目深にかぶった人物がいた。

「・・・・・・。」

フードの人物は、数刻の間滝を見つめていると、その場に魔方陣を一つ描き、その奥に存在する洞窟へと迷わず足を進めていった。
滝の裏にある洞窟。その最奥部には、青白く輝く水晶が安置されていた。フードの人物は、最奥部へと歩を進めると、迷うことなくその水晶に手を触れた。
すると、水晶の前の地面に魔方陣が出現し、光に包まれたフードの人物は光が消えるとともに、その姿も無くなっていた――。

――そして数刻の後、フードの人物が描いていった魔方陣の上に召喚陣が浮き上がり、無数の異形達が出現し、街やビーチの方へと、無秩序に侵攻を始めるのだった。

「ハァ！　セイッ!!」
「やぁ！　たぁ!!」
「ハハハ～！　イッツ、ショーターイム!!」
「マスターさん、街の人達の避難、完了しました！」
「サンキュー、アスカロン！　後はティル達の援護に入ってくれ！」
「はい！」

――街の中で聞こえた破壊音と悲鳴に反応したオレ達は、さっきまでと打って変わって張りつめた空気でその場所へと向かった。途

中でデュリンと一緒に買い物に来ていたロンちゃんとも合流し現場へ向かうと、そこには街の近くの森から来たと思われる骨の異形や、巨大な土くれの巨人等が、逃げ惑う人々を標的にして暴れていた。襲われてる人達を見たティル達は、すぐさまその間に割って入って人々を逃がすように異形達と戦い始めたが、オレは人々を襲っている異形達を見て、内心驚愕してた。

（おいおいおい・・・！　なんでここにＦＧＯの『スケルトン』やら『竜牙兵』やら『ゴーレム』やら『ＦＧＯ』においてはお馴染の雑魚敵達の人型代表格。ゴーレムのみ序章では出てこないが、基本人型の雑魚敵というとこの辺りがおそらく上がると思う。が居るんだ!?）

そう、目の前にいる異形達は、オレが前世で『ファンキル』と並んでよくプレイしていたソシャゲの一つ、『Ｆａｔｅ／Ｇｒａｎｄ　ｏｒｄｅｒ』の雑魚敵筆頭候補の『スケルトン』、『竜牙兵』、それに『ゴーレム』だったのだ。転生してからというもの、この世界で様々な任務で『天上世界』の色々な所へ赴くことはあったし、その中で他の世界と交流する事は無かったわけではないが、こんな風に完全に別世界の敵そのものがまんま、それもこれほどの数が出てくる、と言う事は今まで無かったはずだ。なんでこんな事に？

「？　マスターさん？　どうしたんですか、マスターさん!?」

衝撃的な事実に数瞬動きを止めてしまうオレだったが、アスカロンに声を掛けられた事で、ハッと意識を現実に引き戻した。

そうだ、今は動きや思考を止めてる場合じゃない。まずは人々を安全な所に避難させ、こいつらを倒す。全ての原因を調べるのは、その後でいい！

「すまん、アスカロン。ちょっと思考が飛んでた。お前はデュリンと一緒に、ビーチの方に避難誘導を頼む。あそこなら、まだみんなが居

るから安全なはずだ。」
「っ、はい！　分かりました！」

アスカロンはオレの指示を聞くと、先にティルから指示を受けたであろうデュリンと一緒に避難誘導をしに行った。それを確認したオレは、なだれ込んできてる敵達から人々を守りながら戦うティル達へと指示を出しに行った――――。

――――っていうのがちょっと前の話。で、オレ視点の最初の場面にようやく戻ってくるんだが。

「ん～、もう！　どれだけ倒せばいいの～!?　キリが無いよ～。」

そう、フライ姉がぼやいてる通り、コイツら叩いても叩いても、ちっとも数が減らないのだ。いくら一騎当千の斬ル姫たちが揃ってるといっても、これだけ数で押され続けては流石に疲労の色が見えてくる。あのティルでも、少し肩で息をし始めてるあたり、そのすさまじさが分かると思う。

とはいえ、これだけの数をオレ達や他の休暇で来てるマスター達に隠し通せるはずもないだろうから、どこかに発生源、というよりはコイツらを転送してきてる何かがあると思う。だから、それを潰せれば何とかなるはずだ。さて、それをだれに任せるかだが・・・。

今、街中で敵を食い止めてるのは、ティル、ロンちゃん、クーゲル、フライ姉に、今避難誘導を終わらせて合流したアスカロンの5人。敵の強さ自体はそれほどでもないから、この中から誰か一人が抜けたぐらいなら、ギリギリ抑えられるとは思う。ただ、ロンちゃんはこの中では唯一の槍使いで、クーゲルと一緒にミドルレンジで遊撃してくれてる重要なポジションだから、抜けるのはまずい。クーゲルも同様。フライ姉はクーゲルとは違って、ボードに乗って海上編版フライシュッツは、空中を水のジェット噴射で浮かせてるボードに乗っており、今回のフライ姉も同じような感じで闘っている。空中からロング

レンジでの支援を主としてるから、場所を見つけるのには適してる。ただ、もし抜けた場合、クロスレンジで切り込んでいってるティルの負担が増えるだけ。となると、同じポジションをこなせるティルかアスカロンのどっちかに頼むのがベストだろう。ただ、今回の場合必要なのは、転送元の何かを手早く片付ける『速さ』だ。なら、頼むのは自ずとどちらか。オレの中で、この状況を打開する次の指示を決めるのは早かった。

「フライ姉、そっちの方で空中から何か見えないか?!」
「えっ!? ん～・・・。っ、マスターくん!! 森の滝のある辺りで、何か光ってるよ～!」
「サンキュー!! ティル、そこは一旦アスカロンに任せて戻ってこい!!」
「っ、マスター?」
「フライ姉が、森の奥にある滝の辺りで、光ってる場所を見つけてくれた! たぶん、そいつが発生源だ! それさえ止めれば、後は掃討するだけでこの戦いは終わる! ついて来てくれ! 他の皆は、継続してそいつらを足止めしといてくれ! 頼んだぞ!!」
「はい!」
「ハ～イ!」
「は～い! ティルフィングちゃん、マスターくんを頼んだよ!」
「フライシュッツ・・・。分かりました! アスカロン!」
「はい、後は任せて下さい!」
「頼みます! ハァ!」

ティルは近くに寄ってきてた竜牙兵を一撃で斬り伏せると、すぐさまオレに追従してきた。そして、４人が抑えてくれてる間に、オレ達は滝がある森林の奥へと駆けていった。

「・・・っ、マスター。見つけました。あれですね？」
「ハァ、ハァ。す、すまん。ちょっと待ってくれよ・・・。えー、どれどれ・・・。」

マスターと共に、異族とも違う異形の存在を生み出しているであろう何かを破壊するべく、途中異形の存在と遭遇しないよう少し迂回しながらも到着できました。
現在私達は、滝を挟んで反対側の方から様子を伺っています。すぐに破壊したいのは山々なのですが、その、マスターが少し息を切らしてるのと、異形の存在が未だ出現しては、街ともう一つ、別の方角へと足を向けているのが気になり、マスターに破壊対象を確認してもらって、それから行動に移すべきと判断したので、こうして様子を伺っている次第です。

「あ～、だな。って、地面に直に魔方陣を描いて、その上に発生してる召喚陣から出てきてんのか。」
「はい、そうみたいです。おそらく、フライシュッツが視認したのは、その召喚陣だったのでしょう。」
「ふむ・・・。で、もう一方の向かってる方角・・・って、アレもしかしてビーチの方か？」
「っ、本当ですか？」
「あぁ、たぶんな。まぁ、あっちにはデュリンやアロさん、シェキさん達もいるから、防衛戦自体は問題ないと思うが・・・。」

マスターはそう言ったものの、渋そうな顔をしていました。おそらく、自分の指示のせいで一般の人々を危険に晒してしまったのを後悔してるのかもしれませんが、すぐに表情を元に戻し、私に尋ねてきました。

「・・・ティル、アレ剣でぶっ壊せるか？」

「・・視認する限りは可能だと思います。ただ、何かしらの防御が張ってある場合は・・・。」
「その限りじゃない、か。確かに、スケルトンや竜牙兵はともかく、あんな見るからに重そうなゴーレムを召喚して、地面に影響出てないってことは、何かしらの物理干渉用の障壁はあると見た方が自然か。」

さてどうするか、と呟いて、マスターは少し考え込み始めました。まぁ、流石にフライシュッツから破壊対象の詳細を聞いていなかったので、こちらに来たはいいものの、その後はノープランな気は、マスターの性格から察してはいましたが。幸い、異形の存在はこちらに気付いていないため、少しぐらいは時間があるでしょうが。
と考えていると、突然対岸の方から大きな振動と破砕音が聞こえてきました。

「うおっ、何だ何だ!?」
「っ、新手です、か・・・。」
「ん、どうした・・・、って、あ～、なるほど・・・。」
「・・・察して頂きましたか。」
「あぁ（察し）。アレは、なぁ・・・。」

振動と破砕音のした方角を確認したマスターと私は、その原因が判明したと同時に、場違いだと感じながらも苦笑してしまいました。確かに、『彼女』であれば、あれほどの事をしてもおかしくは無いですよね。・・・おそらく、（彼女的には）貴重な昼寝の時間を邪魔されて、相当怒り狂ってるのでしょうから。
「――よくも・・・、よくも私の貴重な昼寝を邪魔してくれたねこのウスノロどもがぁぁぁぁぁ!!!」

――私とマスターの視線の先にいたのは、眼をぎらぎらと光ら

せ、赤黒い大剣で別の方角、ビーチ方向へと向かっていた異形達を相手に、地面を砕くほど暴れながらこちらへと接近してくる、レーヴァテインでした。

第４話：異世界からの襲撃（中編）

――時刻はまた遡って、クレアがティルフィング達と街を襲撃してきた異形達に対して、防衛戦を始めた頃。

クレア達が休暇として訪れていたビーチの方にも、同じような異形達が侵攻を開始していた。

当初、マスターであるクレアが不在で指揮系統がはっきりしておらず、各々接敵次第各個撃破というバラバラな動きをしていた。トップのティルフィング達が不在とはいえ、元々一騎当千の斬ル姫達が何人もこの場におり、かつ後ろを気にする必要も然程なかったため、多少バラバラな動きをしていても問題が無かったのだ。

だが、デュリンとアスカロンが街の人々を連れてビーチへと戻ってきた事で、状況は一変する。避難してきた人々を守るため、ある程度の陣形を組んで防衛戦をする事を余儀なくされたのだ。ここまで個別で動いていたのもあって、斬ル姫全員の立ち位置は割とバラバラになっていたため、陣形を組み直すのに多少の時間がかかってしまう状態になっており、なおかつ、まだクレアが不在で指揮系統がはっきりしていない状態のせいで、斬ル姫達は苦戦を強いられることとなってしまった。

しかし、いつまでもそんな状態では、いずれ突破されて街の人々に危害が及ぶと考え、その状況を打開するための一声が飛ばしたもの達がいた。

「皆さん、聞いて下さい!!　このままバラバラに戦っていても、いずれ突破されます!!　後衛部隊は、私の所まで下がって、前衛部隊の態勢立て直しを支援して下さい!!」

「前衛部隊は一度下がって態勢を立て直し、後はデュリンの指示で動いて下さい！　ここは私とアスカロンが踏みとどまります!!　だから早く!!　アスカロン!!」

「はい!!　ここから先は、一歩も通しませんよ!!」

声をあげたのは『シェキナー』、『アロンダイト』の二人だった。シェキナーは元々陸寄り、それも避難してきた人々を連れて来ていたデュリンとアスカロンの近くにいたため、後方から弓矢で援護射撃をしていたのだが、他の後衛メンバーは海寄りにいたため、特に防衛線を始めてからはあまり成果が出せずにいた。アロンダイトも陸寄りの場所から、単独であちこちを飛び回りながらきびしそうな戦線を支援していたものの、このままでは埒が明かないと感じ始めていた。

そこで2人は一度合流し、デュリン達を含めて二言三言話しあい、後衛部隊を含めた自身と後から来て比較的体力のあるアスカロン以外の前衛メンバーを下がらせて態勢を立て直し、その後指揮系統をデュリンに一括する事で混乱を少なくする事にしたのだ。デュリンに指揮系統を一括したのは、クレアやティルフィングと付き合いも長く、こういった仕事に向いてると話し合ったメンバー内で判断したためであり、デュリンもそれを了承した。

それが決まってからは行動は早く、アロンダイトとアスカロンは迫りくる異形達へと果敢に切り込んでいき、シェキナーは斬ル姫達が後退しやすいよう、広範囲に弓矢を降らせるようにしていた。アロンダイトとシェキナーの声を聞いた斬ル姫達も、それぞれの役割を全うすべく、態勢を立て直すために動き出した。

それから、ものの数分で態勢を立て直した斬ル姫達は、デュリンの指示のもと、避難してきた人々を守る防衛線を展開。最初は苦戦していたが、態勢を立て直してからは問題なく戦線を押し上げ、現在は侵入してきた森林の入り口とまではいかないまでも、その付近まで戦線を押し返していた。デュリンも、ここまでやれれば大丈夫だろうと判断し、アスカロンをティルフィング達の援護にいくよう伝えて、アスカロンもその指示を聞いて、街の方へと急いで戻っていった。

――というのが、ビーチ側の話なのだが。そんなビーチでの防衛戦が展開されてる中、戦線に参加していないメンバーが一人いた。

「・・・・・・Ｚｚｚｚｚ・・・。」

――――レーヴァテインである。彼女はわざわざ持参してきたハンモックを使い、森林地帯の入り口ほどで寝ていたのである。スケルトンや竜牙兵だけならいざ知らず、体重の重いゴーレムがズシンズシンと侵攻してきて、かつ戦闘の音が聞こえてるであろうのにもかかわらず、である。昼寝を始めたレーヴァテインを起こすのは、どうやらその程度では駄目のようだ。

実は、何人か見かけた斬ル姫も必死に声を掛けていたのだが、彼女が何の反応も示さないのを見て、そのままにしていたのだ。そんな状態の彼女を無理に起こせばどうなるか・・・、それを以前、隊長であるクレアが証明してくれており、故に、『触らぬ神にたたりなし』ならぬ『起こさぬレーヴァテインに破壊なし』とばかりに、放置していた。

・・・が、味方である斬ル姫達はともかく、敵である異形のもの達には、そんな理屈は通用しない。ましてや、知性のかけらすらあるか分からない存在たちである。遅かれ早かれ、今から語る悲劇（？）は必然のものだったのであろう。

アスカロンが街の方へと戻っていって数分後、とあるゴーレムがビーチへと侵攻していく時、偶然にもレーヴァテインがハンモックのひもを掛けている木の一つを折ってしまったのだ。当然、木が折れればハンモックを張り続けることもできず、寝ていたレーヴァテインは地面へと放り出されてしまった。

「・・・・・・ゑっ、あだっ!?　へぶっ?!」

さらに、泣きっ面に蜂といわんばかりに、後ろから来ていた２体目のゴーレムにお腹を踏まれ、悶絶するレーヴァテイン。常人であれば、おそらく骨折どころか、下手をすれば死んでしまうそれを、悶絶だけで済んでいるのは流石斬ル姫という所なのだが。

悶絶して丸まり、少しだけ転がったおかげで、何とかレーヴァテインがもう1回踏まれる事は無かった。・・・しかし、悶絶から回復して、ユラユラと起き上った彼女は、次の瞬間、目をギラギラと光らせ、無言で剣を構えて、視界に捕えたゴーレムへと突貫していき、構えた剣を力任せに、砂煙が高く舞い上がるほどに叩きつけた。

その時、たまたま近くには、レーヴァテインやティルフィングと同じ『ファーストキラーズ』の『マサムネ』、『パラシュ』がいたのだが、いきなり拉致外からとてつもない殺気が飛んできた事に驚き、あわてて二人とも下がると、唐突に目の前にいたゴーレムが沈み、高く砂煙が舞いあがったのだ。そして、その砂煙がはれると、ゴーレムの姿が無残にも砕け散っており、小さな砂のクレーター出来あがっていた。そして、その中心にいたのは、顔をうつ向かせ、だらりと剣を構えたレーヴァテインだった。

先ほどまで寝ていたレーヴァテインを2人も見ていたのだが、前述のとおり、放置していたのだ。その放置していたレーヴァテインが、急にゴーレムへさっきも隠さず飛びかかって、一撃で粉砕した。これだけの情報で、最悪な予感がしていた2人は、その予感が的中していない事を祈りつつ、レーヴァテインに声を掛けた。・・・若干、声が震えているのは、お互い気にしない事にして。

「れ、レーヴァテイン・・・?」
「・・・・・・。」
「だ、大丈夫かい・・・? なんか、すごい勢いで飛び出してきたけど。」
「・・・・・・ねぇ、2人とも。」
「「っ、は、はい!?」」

底冷えするような、地面の下から這い出てくるような低い声と、ギラギラと輝かせ細められた目に射すくめられながら、返事をする2人。この瞬間、2人の中では最悪の予感が的中してしまった事を悟った。すなわち、敵の異形が、偶然かどうかはともかく、『破壊の鬼神』を起こしてしまったのだと・・・。

「コイツらさ・・・、どっから来てんの？」
「え、いや、その・・・。」
「何？　答えられないの？」
「う、ううん！　森林！　あっちの森林の方から来てるんだよ!!」
「そ、そうだ！　私達は、そいつらから、こっちに避難してきてる人達を守ってる最中なんだ・・・。」
「・・・そう。」

と、一言だけつぶやくと、先ほど飛び出してきた速度と全く同じ速度で森の中へと飛び込んでいき、瞬間、とんでもない振動と破砕音、そして獣のような叫び声がこちらへと届いてきた。あぁなってしまったレーヴァテインは止められないと二人も悟っている為、止めにいくような事はしなかった。すれば今度は、自分達がミンチになりかねないと知っているから。

余談だが、振動と破砕音に気づいて一瞬全員がそちらに意識を向けたのだが、陸寄りのメンバーは切れたハンモックを見て、海寄りのメンバーは砂場に出来た小さなクレーターと、何かを悟った二人の表情で全てを察した模様。一応、街の方にも振動と破砕音、叫び声は届いていたのだが、数的不利があったため、気にしている余裕があまりなかった。ただ、叫び声を聞いてビクッとなったメンバーがいたため、ある程度は察していたのだった。

第5話：異世界からの襲撃（後篇）

「・・・さて、思わぬ助っ人・・・、と呼んでいいのか分かんない『鬼神（バーサーカー）』が来ちゃった訳だが・・・。ティル、『アレ』と共闘とかできそうか？」
「・・・3分7分、といった所ではないでしょうか？」
「ハハハ、だよな・・・。ハァ・・・。」

スケルトン達を生み出している召喚陣を破壊するため、色々と作戦を練ってる俺達なのだが、物理干渉の可能性を捨て切れず、動き出せずにいた。だがそこに、おそらく偶然か何かで爆睡していた『破壊の鬼神（レーヴァテイン）』を起こしたバカがいたようで、現在辺りを更地に変えかねない勢いでこちらへ侵攻してきていた。

一応、味方ではあるので会話は可能だろうが、果たしてこちらと共闘してくれるかというと、ちょっと微妙な所である。それに以前、俺はアイツを無理やり起こすという愚行を犯した結果、敵も味方も死病累々、挙句オレまでミンチにされかけたという前科があるため、まともに執り合ってくれるかどうか怪しいというのが、オレとティルの見解なのだ。普段は割とどうでもよさそうな表情をしてるくせに、嫌な事に関しては割とネチネチとついてくるのが、うちの隊のレヴァさんこと、レーヴァテインなのである。

とはいえ、ここでもたついていてはいつまでたっても状況は進展しないだろう。一応、ビーチ方面へ向かってるスケルトン達、特にゴーレムに関してはレヴァさんによって入念かつ徹底的に粉砕されてるようなのでそっちは大丈夫かもしれないが、街側がやばいかもしれない。アスカロンやロンちゃん、クーゲルにフライ姉がうまく戦線を維持できていればいいのだが。

「・・・ここで悩んでても仕方ないか。よしティル、とりあえずいくか。」
「っ、何か作戦があるんですか？」
「あぁ。まぁ、『鬼神』と化してるレヴァさんを説得、ないし誘導しないといけないが・・・。」

「・・・もしものときは、仲介しますね。至らないかもしれませんが。」
「あぁ、頼むな。」
「はい。」

ティルとオレは短く言葉を交わすと、今もまだ暴れる『鬼神』へ協力を仰ぐべく、行動を開始した。

――接敵。一閃。潰す。壊す。
――新手。発見。一閃。破壊。

気持ちよく爆睡していた私を叩き起こした異形共(愚者)を、自分の剣で力任せになぎ倒す。寝起きや怒ってる時って、よく思考が鈍るとか聞くけど、今の私は普段から考えられないくらい頭の中がクリアになっていた。これ、俗にいう『怒りすぎて頭が逆に冷静になってる』って状態なのかもしれないけど、そんなことは今の私にはどうでもいい。そう、今重要なのは、このウザったい睡眠妨害の雑魚共を一分、一秒でも早く殲滅する事のみ！

「ハァァァァァ!!」

怒りのまま、衝動のままに、自らの記憶に宿る破滅の力を振るう。辺りが更地になろうが構うものか。それでコイツらを殲滅出来て、また気持ちいいまどろみの時間に戻れるのであれば、周りがどうなろうが知ったこっちゃない。自己満足？　大いに結構。言いたいヤツには言わせればいい。私は、ただ日々をのらりくらりとゆっくり生きればそれで――

「レーヴァテイン!!」

「・・・あ゛っ゛？」

――雑魚共を潰していると、横から誰かが呼ぶ声が聞こえた。全く、誰よこんな時に？　と、顔を向けると、声を掛けてきたのが誰か分かり、少しだけ思考が冷めた。

「・・・マスターに、ティルフィングか。何？　今忙しいんだけど。」
「レーヴァテイン、私達に協力してくれませんか？　この異形達を、これ以上のさばらせない為にも。」
「異形？　・・・あぁ、この睡眠妨害してきたヤツら？」
「そ、そうそう。で、コイツらどうも、この先の召喚陣から次々に出てきてるんだよ。それこそ、ウジ虫の大群が如く。」
「・・・それで？」

剣をふるって、近づいてくる雑魚共を潰しながら、マスターとティルフィングに話の続きを促す。正直、相手がどこからどう出てくるとかどうでもよかったのだが、マスターが言った『召喚陣』という言葉から、それを潰せば、後はこのあたりのヤツらを掃討してはいおしまいとなるはず。ただ、それだけならティルフィングとマスターだけでもどうにかできるだろうから、私に協力を持ちかけてくる意図が分からない。私だって斬ル姫だ。怒りに任せていようと、それぐらいの思考はできる。

となると、私に協力を持ちかけないといけない何かが、その『召喚陣』とやらにあるのだろう。そう思って話を促したら、案の定メンドーな事が絡んでいた。

「その召喚陣なんだが、地面に直に描かれた魔法陣の上に出現してるんだよ。ティルとオレの推測だと、おそらく何らかの物理干渉を防ぐものがあると思うんだ。あんなでかい図体したのをホイホイ呼び出しといて、魔法陣の方に何も影響が出てないのはおかしいしな。」
「・・・なるほど。そこで私の出番ってわけ？」

「はい。今から非物理要員を探しに行くのも時間がかかりますし、私とレーヴァテインで同時に仕掛けるのであれば、おそらく突破できると判断したので。」

２人の話で、協力を持ちかけてきた理由に納得した。なるほど、確かに物理干渉を防ぐ障壁的なものがあるとなると、いくら『ファーストキラーズ』のリーダーで、マスターと付き合いの長いティルフィングでも突破は厳しいか。その点、私ならパワーはパラシュとほぼ同等・・・、というか、おそらく今の状態ならその均衡を崩せるとも思う。寝起きを妨害された私は、皆曰く『普段のメンドくさがりが消えた鬼神』のような状態らしいし、自分でもどこか、リミッターみたいなのが外れてる感じはしてるから、それに期待してるのだろう。

まぁ、早く寝れるようになるなら、私としても別に手伝うのもやぶさかではない。・・・ただ、やっぱりタダで付き合うのは何となく私の性根的になんかメンドクサイので、ここは一つ、終わった後の報酬を要求するぐらいは許されてもいいだろう。

「・・・手伝うのは別にいいよ。ただし条件がある。」

「・・・何だ？」

私が条件があるというと、マスターが少しだけ口を引きつらせた。ん～、そこまで無茶な要求するつもりは無いし、マスターが出来ない事を要求した事は無いはずなんだけどね。まぁ、無茶振りの一つや二つこなせてこそ、私のマスターをやれるはずだし、そんな表情をしないでもらいたいな～。私の中の嗜虐心が刺激されちゃうじゃない。

「何。別に難しい事じゃないよ？　マスターに帰りおぶって欲しいってだけだし。」

「っ、ちょっとレーヴァテイン！　いくらなんでも図々しすぎでは？」

「いや、私はマスターに聞いてるから。ティルフィングはちょっと黙ってるか、その雑魚達何とかしといて。で、どうなの？」

「・・・それはそれで結構きついんだけどな。」
「何？　なんか言った？」
「イエ、マリモ！『仮面ライダー剣』にて有名な『オンドゥル語』の一つ。大家のお婆さんに追い出された主人公剣崎一真が小声で愚痴を呟くと、それに（バイクで走ってそれなりに距離が空いていたにもかかわらず）聞き取った大家さんが「何か言った？」と威圧的な笑みを浮かべてきたのに対しての発言。本当は「いえ、何も！」と言っているのだが、かつぜつが悪くてこうとしか聞こえない。　・・・わかった、条件を呑もう。」
「フッ、交渉成立だね。」
「っ、マスター!?」
「いいんだ、ティル。」

ティルフィングが抗議の声をあげたけど、マスターはそれを手で制した。うちのマスターは、こういう所律儀だからねぇ。頼めば断らないだろうと思ってたよ。まぁ、断ッテタラマタ地獄ヲ見テモラウダケダッタケドネ。
マスターに止められたティルフィングは、何か言おうと逡巡したものの、結局ため息を一つついた後、剣を構えて口を開いた。

「・・・レーヴァテイン、後ろは任せますよ。」
「ん、オッケー。ま、とりあえずテキトーに片付けますか。安眠妨害のツケ込みでね。」
「あんまり派手にやり過ぎるなよ？　島の一角更地にしましたとか、オレの信用に関わるからな。」
「へぇ～、マスターもそういうこと考えるんだ。意外。」
「違えよ。余計な書類仕事が増えるのが、嫌なだけだ。」
「まぁ、そういう事だろうと思いましたよ。という訳でレーヴァテイン、ここからは最短最速、無駄を極力省いて片付けますよ。」
「オッケー。さぁて、私に本気を出させたんだからさ・・・。楽に死ねると、思わないでよ！」

その言葉を最後に、一気に駆けだす私達。目の前にはさっきぶっ潰してきた雑魚達の残骸を気にもせず、うじゃうじゃと雑魚達がまた湧き出てきていたが、世界を滅ぼした事もある魔剣『レーヴァテイン』の記憶を持つ私からすれば、こんなのは有象無象の寄せ集めが雪崩れてきてるだけにすぎない。ましてや、さっきまでと違ってこっちは信頼できる仲間（ティルフィング）に、的確に指示を出してくれる頭脳（マスター）がいるんだもの。無秩序に破壊を齎してしまう力を、よりよく振るわせてくれる存在がいるなら、私が、私達が負ける要素なんて一つもない！

「ティル、左からゴーレムを迂回して直進！　そのまま突っ切れ!!
レヴァさんは目の前の骨達を撃破次第、ゴーレムを踏み台にして、魔方陣（ターゲット）まで一気に跳躍!!　先に無限湧きの元を断て!!」
「分かりました!!」
「ハイハ～イっ、と！　ティルフィング、合わせてよ。」
「そちらこそ、メンドくさがらないでくださいね。レーヴァテイン！」
「フッ、安眠（と無茶ぶり）の為なら、いくらでも働いてやるっつーの！」

ティルフィングの言葉にそう返し、目の前にいた最後の骨の雑魚を粉砕して、すぐに近くにいた岩野郎を踏み台にして飛び上がった。すぐに魔方陣の位置を確認するために下の方に目を向けると、ティルフィングも魔方陣に向かって直進しつつ、マスターの方に雑魚達がいかないよう蹴散らしてるのが見えた。全く、相変わらず律儀というか、ベタ惚れというか。・・・うん、何か後者で考えてたらほどよく『苛立ってきた』。あの魔方陣をぶっ壊すくらいには、ちょうどいいかも。

「ティルフィング!!」
「っ、はい!!」

私の呼び掛けと同時に、一気に加速して、魔方陣に接近するティルフィング。そして、その短い間に剣に溜めた力を解放し、魔方陣に向かって降り下ろした。

「『ファントムオブラブ』!!」
「『全部夏のせいだし』!!」

ティルフィングの連撃に合わせて、私も跳躍した高所から、一気に力を叩きつける。同時に魔方陣に向かって叩きつけられたそれは、最初こそ魔方陣の上の方に張られた透明な障壁みたいな何かに強く弾き返されそうになったものの、二人で思いっきり押し返してやると、ビキビキッとどんどんヒビか入る音が聞こえ始め、ついに耐えきれなくなってバリンと弾け、地面に直に描かれていた魔方陣に剣が叩きつけられて崩れたことで、その輝きを失った。

マスターも「よしっ!」、と後ろでなんか喜んでるのが聞こえた。が、私もティルフィングも両方魔法陣を破壊するために他をあえて無視していた。ということはまぁ、必然的に――

「ゴォォォ!!」
「っ、ヤバッ!?」

――まぁ、そうなるよね。振り向くと、岩野郎と数体の骨野郎に襲われそうになってるマスターが見えた。流石に死なれたら約束どころじゃないので、駆け出そうと足を踏み出すけど、その横を超速で駆けるピンクの軌跡が視界を横切り、瞬きのうちに骨数体を塵と化して、ティルフィングがマスターへと振り下ろされた岩野郎の腕を受け止めていた。

「くぅっ・・・、マスターには、指一本触れさせません!!」
「ティル・・・。」
「ハァァァァ!!」

ティルフィングは叫ぶと同時に、受けとめてた岩野郎の腕を押し返し、眼にもとまらぬ連撃にてただの土塊へと変えてしまった。ホント、マスターの事となると途端にパワー上がるよね、ティルフィングは。愛故に、ってことなんだろうけど、私にはイマイチ分かんない感覚だ。ロンギヌスやフライシュッツも似た節があるけど、正直私からすると、そこまで好きになるほどかと思ってたりする。悪友、としては割と付き合えそうだけど。

「ハァ、ハァ・・・。」
「すまん、ティル。助かった。」
「っ、いえ！　マスターが無事なら、私はそれで／／／」
「そうか。でも悪いな、また無茶させちまって。」
「い、いえ。お気になさらず。その、私にとってマスターは、大切な人なので・・・。あの、別に、深い意味がある訳ではなくて／／／」
「アー、あのさぁ。戦場のど真ん中でそれ以上イチャつきあうのは、流石にやめてくんない？　糖分過多か熱中症で倒れそうになるから。」

流石にこれ以上は看過出来ず、メンドーだったけど二人の会話に割って入った。ティルフィングは「イ、イチャっ・・・!?」と顔を真っ赤にして俯き、マスターの方はしばらく無言になると、さっきまでの会話を思い出してか少し頬が赤くなって顔を背けていた。いや無自覚だったんかい、二人とも。

そう考えるとちょっとイラついたので、この辺をちょっと更地にして、嫌な事務仕事を押し付けようかと思ったが、流石にメンドくさすぎるのでやめた。私もそこまで子供じゃないし。

というか、いい加減さっさと戦線に復帰してほしいし、と恨みがましい目を向けると、二人とも仲良く咳払いを一つして、元の調子に戻った。・・・こんな時に言うのもあれだけど、これでデキてないというのだから、さっさとくっ付いてしまえばいいのにと思うのは私だけかな？　――――閑話休題。

「さて、あとはまぁこの辺の奴らを掃討すれば、全部片が付くはずだ。二人とも、まだいけるよな。」
「はい。」
「え～、私も？　・・・早く寝たい。」
「終わったら、好きなだけ寝ていいから。頼むよ、レヴァさん。」
「よし、じゃあさっさと終わらせますかね。」

掃討戦なんてメンドーな事は全部ティルフィングに丸投げしようかと思ってたけど、好きなだけ寝ていいなんて聞いたら、やるにきまってるでしょ。二人掛かりで終わらせた方が効率がいいし。より長く寝れるなら、私はいくらでも働くよ。後ろで「チョロい」とか「扱いなれてきましたね」とか聞こえてるのは、気にしない事にした。

その後、ものの数分で残った雑魚達を殲滅した私達は、周囲に敵が無いことを確認して、一度ビーチで集合する事にした。街の方で防衛戦とかやってたメンバーはティルフィングが呼びにいって、マスターには約束通り私をおぶってもらった。ん、『帰り』ってラグーナ島からの帰りじゃないのかって？　何言ってんの、どっちもだよ。当然じゃん？　働いたからには、それに見合った報酬が必要なんだし。ついでに、好きなだけ寝ていいって言ったんだから、ハンモックの貼り直しも手伝(全部やって)ってもらわないと。私のマスターなんだから、これぐらいの要求、飲んでくれるよね？――――

――――数分後、ティルフィングが街の防衛戦を担当したメンバーを連れて戻ってくると、そこにはご満悦な表情でハンモックで爆睡しているレーヴァテインと、その近くで何人かのメンバーに介抱を受けてる疲労困憊のマスターがいたとか。
後に、マスターは語る。「レヴァさんの要求を呑む時は、それ相応の

覚悟がいるわ・・・、ガクッ。」、と。

第６話：交差する運命（前篇）

「ビーチへ避難していた街の人々ですが、無事に帰す事が出来ました。それと、街の被害状況についてですが、防衛にあたってくれたアスカロン達のお蔭で、襲撃を受けた森林に程近い地域以外には、被害らしい被害は無い、との事です。現在、有志を募って、アルテミスやマサムネを筆頭に、復興作業の手伝いをしている所です。」

「そうか。ありがとう、ティル。それにロンちゃんにフライ姉も。それと、すまんな。醜態を晒した挙げ句、仕事を丸投げしちまって。」

「気にしなくていいよ～。あんな状態のマスターくんに、仕事を任せるのは、流石に酷だったし。」

「そ、そうですよ。マスターも、レーヴァテインさんの無茶振りに振り回されてお疲れのようですし、こういう時ぐらい、私達に頼ってください。」

異形達との戦闘から少し時間が経ち、オレはティルとフライ姉、ロンギヌスに集まってもらい、現状の確認と、一先程の醜態・第５話のラスト・について謝罪していた。本来であれば、オレが率先してそういうのの指揮をとらないといけないんだけど、レヴァさんのハンモック設営に張り付けにされてしまい、疲労困憊となってしまったオレは、そういったのを全部ティル達に丸投げしてしまう事になってしまったのだ。

言い訳をさせてもらえるなら、オレも最初は事後処理の指揮を優先したかったんだが、レヴァさんが「これ以上は待てない」と駄々をこねるわ、挙げ句、

「・・・もしこれ以上私を待たせるっていうなら、さっきの場所、更地にしてもいいけど。」

と、半ば脅迫めいた事をすごい笑顔で言うので、皆に申し訳ないと思いながらも、泣く泣くハンモック設営を手伝うはめに。ただ、実態

は手伝いとは名ばかりのただの丸投げだったのだが。アイツ、時々こうやって無茶苦茶な事やらせてくるけど、何か恨まれるような事・・・、あ～、心当たりがない訳でもないな。何度か無理に叩き起こしたり、そんなに今ほど気楽に話す関係じゃなかった頃に、随分馴れ馴れしく接してたりしたし。大抵の人が聞いたら理不尽と思うかもしれないが、アレはオレの態度とかにも問題があったかもしれないから、強くは言えないんだよな。まぁ、実際のところは分からないので、その話はまた今度の機会にするとしよう。

で、どこまで話したっけ。あー、そうそう。レヴァさんのハンモック設営をして、その後疲労困憊で倒れたんだよな。レヴァさんの要望に逐一応えなきゃならんわ、何か荷物移動とかの雑用まで押し付けられるわ、挙げ句寝るのの手伝いまで・・・。そんなこんなで疲れ果てたオレは今、冒頭の報告を聞きつつ、ティル達に介抱してもらっている。ただまぁ、3人ともオレを気遣ってくれてか、膝枕を代わりばんこにしてくれていて、今はちょうどフライ姉の順番だったりする。感想に関しては・・・、ノーコメントで。ただ、ティルが一番落ち着けたかなという気がした、とだけは言っておこうかな。

「ム～、マスターくん。今、ティルフィングちゃんの事考えてたでしょ～？」

「ゑっ？」

何故バレたし。フライ姉、勘良すぎないか？　と思っていると、

「フフフッ。恋するお姉ちゃんに、隠し事は無駄だよ～。」

と、言われた。恋するお姉さん、恐るべし。今後は迂闊な事を考えるのはやめておこう。

一方、オレ達の話題に上ったとうの本人はと言うと、

「？　私が、どうかしましたか？」

と、若干きょとんとしていた。・・・不覚にも、ちょっと可愛いと思ってしまったが、あまり口に出して言うものでもないだろう。ロンちゃんも、何か複雑な笑みを浮かべてるし。

とまぁ、そんな風にほんわかした空気のままで、このまま過ごしてもいいのだが、やはり一つ、解決しておかなければならない疑問がある。それを放置しておくのは流石に後味が悪いし、何より今後の仕事に差し障る可能性もある。場合によっては、教会に報告して、何かしらの対抗策を講じる必要も出てくるはずだ。

「っ、マスターくん？　どうしたの、そんな怖い顔して。」
「？　あぁ、すまん。ちょっとな。膝枕、ありがとう。フライ姉。」
「ん～？　もう大丈夫なの？」
「あぁ。」

そう言って、フライ姉の膝枕から起きて、胡坐の姿勢をとった。まだ日が照ってる砂浜ならともかく、木陰のある地べたでなら、ちょっとひんやりするぐらいで済むしな。

そうして坐り直し、また難しい顔を浮かべると、ティルが察して話しかけて来てくれた。

「・・・やはり、先程襲撃してきた、異形達の事ですか？」
「あぁ。フライ姉、ロンちゃん。悪いけど席外してもらってもいいか？　ちょっとティルと話がしたい。」
「えぇ～？　また秘密の会話？　マスターくん、お姉ちゃんもそろそろ混ぜてくれても――」
「まぁまぁ、フライシュッツさん。マスターも、ティルフィングさんと大事な話があるんですから、ね？　ほら、行きましょう。」
「えっ？　ちょ、ちょっとロンギヌスちゃん?!　わ、わかったから引っ張らないでって～!?」

ティルとの『秘密の会話』に参加したいと駄々をこねるフライ姉を

連れて、強引に浜辺の方へといくロンちゃん。ごめん、フライ姉。流石に事情を知らない人に、この事を聞かれるのはちょっと色々と不味いからな。まぁ、そもそも神様と敵対してる『エンシェントキラーズ』の1人だし、本人の感情を込みで考えると、事情さえ話せば参加させてもいいとは思ってる。けど、流石に今は時間が無いし、あまり多くに拡散されても困る。口が軽いとは思ってないが、これに関しては万が一を考えておかないとな。

ただまぁ、対応がちょっと強引すぎたかもしれない。オレに対して、他のみんなとは何か違う感情を特に向けてくれてる3人の中で、唯一オレの『事情』を知らないから、いつもこんな感じで蚊帳の外に置いちゃってるのは申し訳ないとは思うが。実際、目の前にいるティルもちょっと複雑な表情を浮かべてるしな。

「・・・マスターの『事情』を知らないとはいえ、いつもこれでは、流石にまずいですよね。」
「・・・フライ姉にも、またいつか話そうとは思ってる。ただ、それは今じゃない。」
「ですね。・・・早くても、向こうに戻ってから、ですか？」
「だな。そっちなら、またゆっくり話せるしな。」

ティルにはどうやら、オレの話そうと思っていたタイミングは分かっていたようで、返事しながら、互いにどちらからともなく苦笑した。ただ、フライ姉の事をいつまでも話しているわけにもいかないので、すぐに空気を真剣なものに切り替えた。

「・・・さて、ティルはもう『事情』知ってるし色々省くが、あれは別世界から召喚されたものとみて、まず間違いない。」
「やはり、ですか。」
「あぁ。それも、異世界とかいうレベルの場所から、だな。」
「異世界・・・。そんな存在が、どうしてここに？」
「・・・正直に言うと、わからん。オレ以外に、別世界の魂が『転生』

して何かしでかしてるのかもしれないし、はたまた別の思惑が絡んでるのかもしれない。」
「現状では、原因が分からない。そういう事ですね？」
「そうだな・・・。仕方なかったとはいえ、魔法陣も派手にぶっ壊したから、調査しようにもなぁ。」

今思い返すと、人的被害をなるべく最小限にしようと動いていたとはいえ、もう少しやりようがあったのではと考えなくもない。ただ、やはり被害を抑えるという面を重視するのであれば、あの場ではおそらく最善の策だった
はず・・・。でも、もしこれが何かの前触れ、もしくはオレの『事情』絡みの問題だとすると、明らかにオレという『異物』がいる以上の歪みが起こってると考えられる。直接の原因がもしオレじゃなかったとしても、間接的にでもオレのせいでこの歪みが起こったのだとしたら、その決着はオレ自身でつけなきゃいけない。それがあの日、『女神』様に救われ、原典とは異なる存在としてこの地に降り立った、オレなりのケジメの付け方だ。

「・・・マスター、そんなに思いつめないでください。この場にはいませんが、ロンギヌスも、そして私もいるんですから。」
「ん、急にどうしたティル？」
「急に、ではありません。今のマスターの顔は、その、見ていてすごく、胸が痛みます。そんなに私は、私達は頼りないですか？」
「・・・あっ。」

ティルの泣きそうな眼を、こちらを心配する表情を見て、オレはハッとなった。しまった、またオレの悪癖がでてたか。つきあいの長いティル曰く、オレは割と表情に出やすいらしく、自分自身の事で色々と考えていると、時々恐い表情になってる事があるらしい。どうやら、またそんな表情をしてたから、ひどく心配させてしまったようだ。

「す、すまん。またオレ・・・。」
「・・・謝らなくて、いいです。謝るぐらいなら、『頼りなくない』って、証明して下さい。」
「・・・どうやって？」
「・・・言葉で言わないと、分かりませんか？」

そう言って、右腕を左手で押さえ、ほほを赤くして拗ねるようにそっぽを向くティル。・・・そこまでされたら、流石のオレでも何となく、察しがついた。・・・それが『頼りなくない』って証明になるのかは、オレにとっては疑問なんだが、滅多に我を通さないティルが求めてきてるのだ。応えなければ、マスター、いや、それ以前に男として失格というものだろう。

オレはそっと立ちあがってティルに近づき、顔を正面に向かせて、優しく抱きしめた。・・・正面に向かせた時に、一瞬キスしようかと思ったが、流石にそこまでやるのは、ティルとしても不本意だろう。やるにしても、オレの思いを告げて、それが実ってからと決めてるし。別に日和ったとか、チキンだとか、そういうのでは決してないからな！

「これでいいか？」
「・・・ダメです。もっと、もっと抱きしめてください。もっと、あなたの鼓動を感じられるぐらい。」
「分かった。」

ティルを抱きしめる腕に、もっと力を込める。すると、恐る恐るといった感じで、ティルの方からもこちらに抱きついてきた。そして、オレに聞こえるか聞こえないかぐらいの声で、こう言った。

「・・・マスターは、不器用なんですよ。誰にだってきっと、自分一人で背負うには重いと感じるものがあります。私だって、そうです。で

も、それを一人で背負う必要はないはずですよ。たとえ、それを共有できる人や、共感してくれる存在が少なくても、私は、私だけは、いつだってあなたの傍にいます。何があろうと。・・・いえ、これは不適切ですね。私と、ロンギヌス。それにフライシュッツや、他の隊の皆も。『事情』を知らない人達も、きっとあなたの事をもっと知ってくれれば、きっとそう言ってくれるはずです。」
「ティル・・・。」
「だから、何度でもいいます。マスター、一人で抱え込まないでください。今は少なくても、私とロンギヌスが、あなたの苦悩を分かち合いますから。」

そういうと、ティルは顔をこちらに向けて、優しげな笑みを浮かべた。それは、さっきまでの悲しそうな顔よりも綺麗で・・・。あぁ、やっぱりこの表情が、オレは好きだ。ティルはやっぱり、笑顔が似合う。それを曇らせてたなんて、やっぱりオレは・・・っと、ダメだダメだ。こんな風に考えたら、またティルを心配させてしまう。それじゃ堂々巡りだ。オレもちゃんと、言葉で伝えないと。

「すまん、ティル。オレ、やっぱりダメダメだな。お前にそこまで言われないと、いや、言われても、中々直せないなんて。」
「フフッ、構いません。これでも、付き合いは一番長いですし、そういう難儀な性格だという事は、分かってますから。それに、そんなあなたの事が、私は・・・。」
「ん？　悪い、後半よく聞こえなかったんだが・・・。」
「ッ!!　い、いえお気になさらず!!　何でもないので!!」

そう言って、顔を真っ赤にして恥ずかしがるティル。いや、今回はマジで何言ってるか聞こえなかったんだが。何だろう、もしかしてオレも、どっかしらに鈍感スキルを持ってるとか、か？　それはさすがに嫌なんだが。まぁ、本人が何でもないって言うなら、何でもない・・・のか？　でも、ここで無理やり聞くのは、なんかデリカシーに欠ける

というか・・・、とか考えていたら、唐突に視界に誰かが走って来たのが見え、こちらに来ると同時に叫んだ。

「マスターさん、来てください!! フォルカスちゃん、が・・・・、。」
「ハァ、ハァ・・・。ま、待って下さいアスカロンさん! 今マスターの所にいく、の、は・・・・。」
「マスターくん! ちょっと緊急事た、い・・・・・。」
「・・・・・・・。」
「・・・・・・・。」

最初に来たのは、何か焦ったような表情から唖然とした表情へと変わっていったアッスーことアスカロン。そして、その後ろからアッスーを追って来たであろうロンちゃんとフライ姉であった。二人も、最初は焦った表情をしていたのだが、目の前の状況を見て理解した途端、徐々に真顔に変わっていった。

さて、勘のいい読者諸君は気づいているだろうが、今の状況、一言で言うなら『ヤバい』、である。今、彼女達の視界には、互いに抱き合っているオレとティルのみが映っていて、しかもかなり密着気味。そして、そんな状況をアッスーはともかく、ロンちゃんとフライ姉に見られた。・・・うん、もうはっきり言おう。『修羅場』であると。まずい、このままだと間違いなく、あのスケルトン達の襲撃直前の状況の二の舞、いや、それ以上に厄介な事になりかねん! だというのに、見られると思ってなかったのか、あまりの状況に身体が固まってしまい、動けそうにない! それに、何故かはわからんが、最低でもロンちゃんとフライ姉だけでも説得出来そうな弁明も今は思いつかない。どうした、オレの頭! そ、そうだ! ティルなら何とか二人を説得を、とそちらを見てみると、ティルの表情が見る見るうちにまっ赤になっていき、口をわなわなとふるわせながら開いた。

「・・・・・・・・・・・・き。」
「き?」

「キャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!!!」
「ぶべらっ!?!?!?」
「っ、マスターさん!?」
「っ、マスター!!」
「っマスターくん!?」

（おそらく）ティルの（斬ル姫としての）全力で、思いっきり突き飛ばされるオレ。そして、オレの方が浜辺側にいたため、オレは浜辺を『ローリンガール』よろしくゴロゴロゴロゴロと転がっていき、何か分からんが唐突に舞い上がって海へと落下した。あぁ、沈むってこういう感覚なのか・・・、とか割とヤバそうな思考が片隅をよぎったが、そんな事を考える暇もなく、浜辺の方から微かに聞こえる声を聞きながら、オレの意識はそこで途絶えたのだった。

第7話：交差する運命（中編）

「本当に、すみませんでした!!」
「い、いやぁ。気にすんなって。こうして、オレは生きてんだし。」
「もう～、マスターくんは甘すぎだよ！　あのままだったら、下手すると死んでたかもしれないんだから！」

抱き合っていた姿を見られた恥ずかしさのあまり、マスターを突き飛ばしてしまい、それから海へ沈んだマスターを救出してしばらくした後。私は、マスターに対して危うく死なせてしまうかもしれなかった事を謝罪していました。あっ、挨拶が遅れました。どうも皆さん、ティルフィングです。

で、話を戻しますが、マスターは先程の事を、笑って受け流してくれましたが、フライシュッツの言う通り、もしあのまま海に沈んでいれば、マスターの命は無かったのかもしれないのですから。

ただ、マスター曰く「ギャグシーンで死ぬ奴は、大抵『ランサー』だって相場は決まってるから例：『「ランサーが死んだ！」→「この人でなし！」』。つまりそういう事。」とかなんとか。あの、『事情』云々以前に唐突にメタ過ぎる気がするのですが。それに、この場にはちょうど槍使いが二人もいるのですから、その発言は不謹慎な気がします。・・・えっ、男限定、ですか？　そ、そうですか。なら、安心なんでしょうか。

さて、現在この場にいるメンバーですが、私とマスター、さっき来たアスカロンにロンギヌス、フライシュッツに加え、新たに『セブンスキラーズ』の1人で、アスカロンの親友『フォルカス』が来ています。どうやら、彼女が何か、マスターに伝えたい事があるそうなのですが、アスカロンがマスターを呼びに行くと言い、ちょうどそこにロンギヌスとフライシュッツが鉢合わせ、事情を聞いたフライシュッツが自分も行きたいと言いだし、二人が暴走。ロンギヌスも止めようとしたそうなのですが、結局アスカロンが先走って私達の所に到着。ロンギヌスとフライシュッツも後から追いつき、さっきの状況になった

ようです。
　話を聞いたマスターは、苦労をかけたロンギヌスや、仲間外れにしてしまったフライシュッツ、報告があるのに色々と後回しにしてしまったアスカロンとフォルカスに謝罪していました。それと、先程私とだ、抱き合っていたのは、（話の内容を暈しながら）私が落ち込んでしまい、それを慰める為であって、深い意味は無いと言って納得してもらいました。まぁ、私と同じで、長い事マスターと一緒にいるロンギヌスや、マスター一筋（恋愛的な意味で）なフライシュッツ辺りは何か感づいていそうですけど。
　とまぁ、色々本来の目的から外れに外れてしまっていたのですが、マスターがわざとらしく咳き込んで、新たにこの話し合いの輪の中に入ってきている一人、フォルカスに目線を向けました。そういえば先程、アスカロンがフォルカスに関して何か慌てていましたが・・・。見た所、おかしな点もありませんし、特に怪我等をした訳ではないのでしょうか。
　マスターも同じように考えたのか、何があったのか、事情を尋ねていました。すると、フォルカスは僅かに逡巡したものの、
「何かあってからじゃ遅いんだ。頼む、フォルさん。話してくれないか？　どんな事でも構わないからさ。」
　という、マスターの言葉を受けて、アスカロンに一度目を向けてから、再度マスターに視線を戻して口を開きました。

「・・・実は、さっきの襲撃があってから、時々、声が聞こえるんです。いえ、聞こえるというより、頭の中に、響いてくるというか。」
「声？」
「それは、どんな声が響いているんですか？」
「・・・『人』、より正確に言うと、『人類』、彼らが繰り返す悲劇の連鎖に対する嘆きと怒り、憐憫。そして、それに対して何もしない、『万能の王』への怨恨。そう言った、負の感情が、頭に響く声となって、響いているんです。」
「っ!?」

フォルカスが頭に響く声の事を話すと、マスターの顔色が一瞬驚愕に染まりました。そして、手で眼を覆って上を仰ぐと、「・・・最っ悪だ。『仮面ライダービルド』の主人公、桐生戦兎がよくつぶやく台詞。本人的に最悪な気分になる事や、頭と心が真逆の結論に至った時に特にいう。逆に、本人的に最高な場合は「最っ高だ！」とテンションアゲアゲで頭をかきながら言う。」と、小声で呟くのが聞こえました。マスターの様子に、私とロンギヌス以外のメンバーが訝しむも、マスターがすぐに真剣な表情になって口を開いたのを見て、質問を挟む人はいませんでした。

「・・・フォルさん、今声はどうなってる？」
「えっ？　・・・そうですね。まだ聞こえてます。」
「なるほど。なぁ、その声って、場所によって聞こえたり聞こえなかったりするのか？」
「頭に響く感じは、ずっとしてますね。ただ、森の方に近づくと、気持ち少し強くなってる気がします。まるで、共感できるなら来いと、私を呼ぶように。」
「ふむ・・・。よし。皆、悪いけど今から、ちょっとオレに付き合ってくれるか？　もしかしたら、さっきの襲撃の元凶、ないしはその足取りを見つけられるかもしれない。」

フォルカスの言葉に口元を押さえて少し考え込むと、マスターは真剣な表情で私達にそう頼んできました。その眼には、普段なかなか見られない、自信がある、といった色をしていました。ただ、手掛かりとなる魔法陣はすでにない状況なので、事情が掴めないフライシュッツ達は首をかしげて疑問を口にしていました。

「え～っと、マスターくん。確か魔法陣はもう壊しちゃったんだよね。今のフォルカスちゃんの話から、どうして襲撃の元凶が見つけられると思ったの？」

「・・・疑問に思うのはもっともだ。ただ、これに関してオレは、確証があるんだ。もうティルやロンちゃんは知ってるからいいとして、オレにはちょっと、人には話しづらい『事情』があるんだ。今回の事は、それと関係してさ。だから、あとでここにいるメンバーには絶対、それについても話す。だから、頼む。ここはオレに付き合ってくれないか？」

そう返すマスターの表情は、少し愁いを帯びていました。まぁ、普通に考えれば、「今は自分の『事情』は話せないけど、あとで話すから黙ってついて来て欲しい」と言う事ですからね。マスターは性格的に、こういった隠し事はあまりしたくないタイプですし、自分の『事情』についても、話せるなら全員に話してもいいと考えていると、以前聞いたことがあります。ただ、今の自分の立場と、抱えている『事情』が『事情』なだけに、おいそれと話してそれが外に漏れてしまったら、私たちを今以上の危険に巻き込んでしまいかねない。そう考えて、隠しているとも。だから、話せない事に対して、少し負い目を感じているのでしょう。元々、自己評価が高くない方ですし、悩みを貯め込んでしまう癖がありますから。

ただ、そんな様子のマスターを見て、ハァとため息をついて、フライシュッツは「しょうがないなぁ。」といった感じで口を開きました。

「も～、そんな顔でそんなこと言われちゃったら、これ以上何も言えないじゃな～い。」

「フライ、姉？」

「わかったよ、マスターくん。今はマスターくんに付き合ってあげるよ。アスカロンちゃんとフォルカスちゃんも、それでいいよね？」

「えっ？　あっ、はい。私、難しい話とかよく分かんないですけど。でも！　マスターが私達を必要としてくれてるなら、喜んで力になります！」

「・・・正直、私の話が、先ほどの襲撃にどう関係しているのとか、気になる事はあります。でも、マスターが必要としてくれて、その『事

情』と言うのも話していただけるのなら、私も力になりたいと思います。」
「アッスー、フォルさん・・・。ありがとう、宜しく頼m「その代わり！」っ、何だフライ姉？」
「さっきマスターくんが言った通り、私達三人にも、ティルフィングちゃんやロンギヌスちゃんが知ってるマスターくんの秘密、ちゃんと話してね。」
「・・・あぁ、もちろんだ。そういう約束だしな。」

フライシュッツにそう返事するマスターに、もう愁いの色は残ってませんでした。・・・やはり、マスターにはこういった表情の方が似合っています。先ほどまでの悲しみや負い目を浮かべた表情は、マスターにはふさわしくないです。そして、そんなマスターに私は――――

「――――ティルフィングさん。」
「ひゃあっ!?」
「「？」」
「？　どうしたんですか、変な声をあげて？」
「ろ、ロンギヌスですか。ど、どうしました？」
「いえ、マスターの方をずっと見ていたので、気になって・・・。」
「そ、そうですか。」
「？　大丈夫か、ティル？　何か変な声上げてたけど。」
「い、いえ。お気になさらず。私は大丈夫です、はい。」

び、吃驚してしまいました。急にロンギヌスに声を掛けられて、変な声をあげてしまうとは。マスターやアスカロン達も、心配そうな眼でこちらを見てきますし。・・・唯一、ロンギヌスの言葉で何かを察したフライシュッツだけが、複雑な表情でこちらを見ていましたが。
何はともあれ、私達６人は、フォルカスとマスターを先頭に、先ほどの魔法陣があった森の奥へと、再び足を踏み入れる事にしました。

――今思えば、ここでの選択が違っていれば、私達はおそらく、マスターが以前言っていた、『正史』と呼ぶべき時間に近い時を過ごしていたのかもしれません。世界樹たる『ユグドラシルの樹』を巡る戦い、そして、その後の、『失われた千年王国（ロストラグナロク）』の戦い『ファンキル』メインストーリー第2部『失われた千年王国編』の事。主人公の斬ル姫がティルフィングからアルマスという子に変わっており、今までの斬ル姫達も『霊装支配（ギアハック）』というものを受けて強化されている等、大幅な変更が加わっている。この『霊装支配』を受けた斬ル姫達を解放し、世界に平和を取り戻すのが第2部の大まかな目的となっている。を、どんな形であれ、共に駆け抜ける事になっていたのでしょう。

ですが、私達は選択した。フォルカスの中で響く『共鳴』に導かれて。

この選択が、私達と、ひいては部隊に所属する『斬ル姫』達、そして、『正史』においては邂逅出来ない存在達との、未知なる運命の交差を齎す事になるとは、この時に私達には、まだ想像もできないのでした――。

第８話：交差する運命（後編）

「・・・どうだ、フォルさん。まだ聞こえてるか？」
「はい。それも、だいぶ強く、うぅ・・・！」
「だ、大丈夫フォルカスちゃん!?　マスターさん、やっぱり、これ以上は・・・。」

襲撃から幾許かの時が経ち、フォルさんから話を聞いて数分後。オレ達６人は、フォルさんの頭に響く『声』を頼りに、先程スケルトン達を生み出していた魔法陣があった、森の奥の滝近くまで来ていた。一応、何か不足の事態が起きては困るので、部隊の方はティル経由でデュリンの方に任せてある。

あと、オレの読みが正しければ、おそらくフォルさんの頭に響いているのは、ＦＧＯ第１部に置いて、『人理焼却』というとんでもない事をやらかした『採集決戦の的』、もとい、あの『７２柱の悪魔』達の、ひいてはその集合体たる『憐憫の獣（ビーストⅠ）』の嘆きの声であろう。『万能の王』というのにも心当たりはあるし、何よりその声を、当時ゲームという形で１プレイヤー視点で読んでいるオレからすれば、その声に思う所がない訳ではないが。

それと、フォルさんにのみ聞こえているのは、おそらく『７２柱の悪魔』の内の１体と同じ名前を持つからだろう。向こうだと似た名前に確か、『フルカス』とかいう呼び方のやつがいたけど、多分そいつだと思う。『生命院』にくっついてる目立たないやつだったが、同名の存在、この場合『同位体（本来の使い方と違うかもしれない）』と仮に呼称するが、おそらくそいつが原因だろう。――閑話休題。

で、今そのフォルさんの頭に響く声を頼りに歩を進めているのだが、流石に頭の中に、それも負の感情をドロドロに混ぜまくった（怨嗟、慟哭ｅｔｃ．）の声が、しかも歩を進める旅に強くなってるのだ。当然、フォルさんにかかる負担は推して知るべしという奴だろう。アッスーも心配して、これ以上のフォルさんの同行を中止した方がいいと進言してきたが、件のフォルさん自身が、その提案を止めた。

「大、丈夫だよ。アスカロン・・・。もうちょっとだけ、頑張らせて。それに、アスカロンが信じて、傍にいてくれるなら、こんなの、何ともない・・・！」
「フォルカスちゃん・・・。うん、分かった！」
「無理だけはしないでくださいね、フォルカス。最悪、私達だけでも何とか調査は進めますので。」
「いえ。ここまで来ておいて、離脱する訳にもいきません。せめて、最後まで責任は、果たさせて下さい。」
「・・・分かりました。ただし、本当に無茶だけはしないようにしてください。」

　ティルの提案にも、フォルさんはうんとは頷かなかった為、無理はしない事をティルが厳命した上で、再び移動を再開するオレ達。そうして歩を進めていると、然程経たずに魔法陣のあった場所に到着した。さすがにあれ程の一撃（第5話のヤツ）を叩き込んだだけあって、原形を留めるどころか地面が軽く抉れていたので、場所自体は見つけるのに時間がかからなかった（見つけたティルも、「レーヴァテインと一緒とはいえ、少しやり過ぎたかもしれませんね。」と思っていたのは、完全な余談である）。
　まぁ、ここまではあくまで前座だ。さて、ここからはフォルさんにより負担を強いてしまう事になるが、現状彼女にしか、この元凶への手掛かりを探れる存在がいない為、仕方がない。

「・・・フォルさん、ちょっとこの辺を適当にウロウロしてみてくれないか？　もし、頭に響く声が少しでも強くなったら、教えて欲しい。他の皆は、ちょっとここで待機だ。」
「了解です。」
「分かりました。」
「は～い。」
「分かりました・・・。うっ・・・。」

「っ、フォルカスちゃん!!」

オレが出した指示でフォルさんが動き出すが、ここまで溜めてる負担がキツイのか、フラッと倒れそうになった。慌ててアッスーが支えに入るも、かなり息も切らしており、やはり辛そうだった。・・・こんな時、負担を肩代わりしたり、他に力になってやれないのが悔しい。が、あの時(プロローグで)オレが選択した道だ。なら、調査が滞るとしても、せめてその負担が少しでも減らせるよう、指示を出すしかない。元々、オレの我儘でついて着てもらってるようなものだしな。

「・・・すまん、やっぱり――――」

「――――いえ、大丈夫、です。アスカロンに支えてもらえば、いけます・・・!」

「フォルカスちゃん・・・。」

オレにそう返すフォルさんの目は、オレに「ここで外すのは許さない」、「自分の我儘に付き合わせて、それに自分達も同意した。だから、ここで仲間外れにされるのは嫌だ。」と言っているような気がした。明らかに無理してると分かってはいる。が、そんな目をされては、流石にオレも、これ以上止める気が出なかった。

「・・・分かった。アッスー、頼んでいいか?」

「・・・はい!」

アッスーに支えて貰いながら、足を動かすフォルさん。そんなフォルさんに、たまに心配そうな視線を向けながらも、二人三脚で足を進めるアッスー。普段はアッスーが無茶してフォルさんが支える事が多い為、こういう光景を見るのは、場違いと思いながらも、少し新鮮だった。――――閑話休題。

そうして、俺達の周りをうろうろしはじめたが、どうにも成果はなさそうだった。時々、アッスーが尋ねているが、フォルさんも首を傾

げたりするばかりだった。が、森の奥にある滝から離れるように歩くと、弱くなったと感じたらしく、その為、二人は次に滝の方向へと足を向けたのだが、すると途端に、「うぅ・・・！」と唸って、急にフォルさんがしゃがみこんだ。

「っ、フォルカスちゃん!?　大丈夫?!　しっかりして!!」
「ハァ、ハァ・・・。」

　アッスーが肩を揺すって声をかけるも、これ以上は厳しいのか、頭を押さえて、呼吸を荒くしているだけで返事を返せそうになかった。それを見たオレとティルは頷き合うと、二人に近づいて、アッスーに言葉をかけた。

「アッスー、すまん。ここでフォルさんと待っててくれるか？」
「えっ、マスター？」
「ここで戻れって言うのは簡単なんだが、それだとフォルさんが納得しないだろう？　だから、アッスーはここで、フォルさんと一緒に休んでいてくれ。ここから先は、俺達４人で行ってくる。」
「で、でも・・・。」

　オレの言葉に逡巡するアッスー。まぁ、さっきフォルさんとあんなやりとりした直後だしな。きっと、無茶してでもついていきたいっていうフォルさんの意志を尊重したい、けど、これ以上無茶は重ねて欲しくないって言う気持ちもあるから、どう返事するべきか迷ってるんだろうな。すると、横にいたティルとロンギヌス、フライ姉が、アッスーを諭すように言葉をかけた。

「アスカロン。今のフォルカスを一人にするのは、流石に危険です。それはわかりますよね？」
「は、はい。」
「なら、あなたはここで、フォルカスを守ってあげてください。それ

が、あなたの今やるべき事です。もし、私達が戻るまでに彼女が動けそうになったら、彼女をビーチの方へ連れて行って下さい。」
「ティルフィングさん・・・。」
「アスカロンさん、私からもお願いします。フォルカスさん、きっと動けるようになったら、無茶すると思うんです。だから、親友であるアスカロンさんに、ここはお任せしたいんです。」
「確かに、どこかの誰かさんと同じで、フォルカスちゃんも割と無茶しがちだしね。だから、アスカロンちゃんはしっかり、フォルカスちゃんの手綱を握ってあげて。本人の気持ちを尊重したいのも分かるけど、無茶する子の引き際はちゃんと見極めてあげるのも、時には必要だよ。」
「ロンギヌスさん、フライシュッツさんも・・・。分かりました！　マスターさん。それに皆さんも、気をつけて下さいね。」
「あぁ。・・・よし、じゃあ行きますか。」

元気よく返事をしたアッスーは、フォルカスを何とか背中におぶって、近くの木の裏へ移動していった。それを見届けたオレ達もまた、フォルカスが頑張って教えてくれた、元凶の手がかりがあるだろう場所、滝の方へと足を進めていった。

「・・・どうだ、何かありそうか？」
「そうですね・・・。あっ、マスター。滝の裏側に、まだ道が続いています。」
「滝の裏？　こりゃまたベタな展開だな。」

マスターくんと私達が滝の近くについて探索を進めて早く。マスターくんがティルフィングちゃんに何か見つかったか聞いてみると、滝の裏にまだ道が続いているのを見つけてくれていたよ。あっ、どうも～。最近水属性のコマンドキラーズ『ファンキル』におけるグルー

プの一つ。第2部『失われた千年王国』編にて登場した、『神令（コマンド）』と呼ばれる『霊装支配（ギアハック）』を受けたエンシェントキラーズ達の事。ストーリー上では狂気的な仮面をつけており、以前はあった理想の英雄的な姿は、もはや影も形も残っていないと言っていい程変化している。最大の特徴として、全員が司っていた徳が「共鳴なき○○（○○は司っていた徳名）→×」というものに変わっており、それぞれ（『○○→×』で表記）『革命→黄昏』、『勇気→孤高』、『希望→信念』、『正義→断罪』、『節制→支配』、『愛→蒐集』、『知恵→盲目』、『信仰→陶酔』という大幅な変化を起こし、『霊装支配』も相まってその司っているものに固執するような性格となっている。としてのユニットが増えた、皆のお姉さん、フライシュッツだよ～。ここからは、私の視点で進めていくね～。

「フライ姉、誰に向かって喋ってんだ？」
「ん～、読者の皆～。」
「メタいメタい。第四の壁越えちゃダメでしょ。」
「アハハ・・・。相変わらず、こんな時でも自由ですよね。フライシュッツさんは。」
「自由過ぎるのも、困りものですがね。それとマスター、先程の道ですが、小さな洞窟のようになってるようです。道幅も、縦に並ばないと、人一人通るので精一杯な狭さですが、どうしますか？」
「アッスー達にあぁ言った以上、ここで引き下がるなんて選択肢はとうに捨ててるさ。ティルを先頭に、ロンちゃん、オレ、フライ姉の順番で並んで入るぞ。」
「分かりました。フライシュッツ、くれぐれもマスターに迷惑をかけないでくださいね。」
「は～い。」

やった～、マスターくんの近くだ～。よ～し、めいいっぱいアピールしよう、と思ってたけど、ティルフィングちゃんに先手を打たれて釘を刺されちゃった。しょうがない、甘えるのは帰ってからにしよう

かな。
・・・それにしても、マスターくんの秘密って、いったい何なんだろう。ティルフィングちゃんにロンギヌスちゃんは、何か知ってるみたいだけど、ティルフィングちゃんはともかく、ロンギヌスちゃんは付き合いとして、私とそう大差はないはずだし。
まぁ、かくいう私も、ちょっと―他人《ひと》には言えない秘密があるにはあるんだけど。内容が内容だから、今は読者の皆にも言えないんだけどね。こればかりは、流石に他の『エンシェントキラーズ』の皆が目覚めたとしても、言えないよね。実際、『あの人』にも口止めされちゃってるし。
まぁ、私の秘密はどうでもいいとして。問題はマスターくんのヒ・ミ・ツ。いったい、何を教えてくれるんだろう。ん～、「実は神様の遣いでした！」、とかだったりして。アハハ、まさかね～。・・・もし本当だったら、割と笑えない冗談なんだけど、ね。ハァ、こういう時、頭のいいミネルヴァちゃんとかがいてくれたらな～。私って、こういう時でも自分の『好き（もちろんＬｏｖｅ）』って気持ちを優先したくなるというｋ「イデッ!!」、ん？

「っ～～～～!!」
「あっ、マスターくんごめ～ん!!　大丈夫～!?」
「・・・自分の身長が低い事を恨めしく思ったのは、高い所の物を取ろうとした時以来だな。というか、フライ姉も大丈夫か？　おもっくそ頭が胸とぶつかってたし。」
「私は平気だよ。ごめんね、色々ちょっと考え事しちゃってて。」
「そっか。まぁ、もしオレの『秘密』の事を考えてたのなら、もう少しだけ我慢してくれ。ここを調べて戻ったら、絶対話すから。」
そう言うマスターくんの顔は、少し悲しそうな表情をしていた。まぁ、マスターくん自身も、隠し事は好きじゃないって言ってたから、やっぱり罪悪感を感じてるんだよね。・・・ダメだな、私。こんな顔をさせたかったんじゃなかったのに。よし、ここはお姉ちゃんとして、ちゃんと弟を慰めてあげないと。

「っ、フライ姉?!」
「もう、マスターくんは抱え込み過ぎ。確かに、隠し事をされたのは、ちょっとイヤだったけど。でも、それも事情があっての事なんでしょ？　なら、お姉ちゃんは怒らないよ。だから、そんな悲しそうな顔しないで。ね？」

マスターくんを抱きしめながら、そう優しく語りかける。マスターくんは、急に抱きしめられて、最初混乱してたけど、「ごめん。」と謝って、ギュッと抱きついてきた。

「謝らなくていいよ。私は、マスターくんが好き。大好き。だから、そんなマスターくんの秘密なら、どんな事でも受け入れるから。だから、気にしないで。」
「・・・うん。」
「ええ、マスターは気にしなくていいです。それとフライシュッツ、そこを動かないでクダサイネ。」
「・・・へっ？　アイダッ!?」

マスターくんの返事の直後にティルフィングちゃんの声が聞こえたかと思うと、脳天に思いっきり何かを叩きつけられた。イッタ～、もう何なの～。私はただ、マスターくんを慰めてただけだったのに～。

そんな恨みがましく声のした方を向くと、そこにはいかにも「私、怒ってます!!」といった感じのティルフィングちゃんと、その後ろに苦笑しているロンギヌスちゃんがいた。ティルフィングちゃんは、右手の人差し指と中指を額に当てると、盛大に溜息をついてから、口を開いた。

「ハァ～～。先程釘を指したばかりなのに。仕方なかったとはいえ、あなたをマスターの近くに配置するのに同意したのは失敗でした

ね。」
「そんな事言わなくてもいいでしょ～！　だいたい、今のはマスターくんが落ち込んでたから、慰めてあげようとしただけだし!!」
「だからといって、そこまでやる必要はないでしょう？」
「ティルフィングちゃんだって、さっきやってたクセに～!!」
「グエッ!?」
「なっ!?　あれはその、泣きそうだったマスターを落ち着かせる為に、仕方なくですね！」
「ほら、似たような理由じゃない!!　だったら、ティルフィングちゃんに止める権利はないはずだよ!!」
「ン～～!!　ン～～～!!」
「人がやってるからオッケーなんて、子供ですかあなたは!!　時と場合を考えて下さい!!」
「ふ、二人とも、こんな所で喧嘩しないでください!!　それよりもフライシュッツさん、マスターが!!」
「「へっ・・・？」」

ヒートアップにヒートアップを重ねた私とティルフィングちゃんの喧嘩に、ロンギヌスちゃんが仲裁に入ってきた。そして、私にマスターくんの様子を見るように促すと、そこには胸に顔を埋めて身動きを取らないマスターくんが、って胸!?
「ま、マスターくんごめんなさ～い!!　息止めちゃってた～!!」
「なっ!?　マスター、しっかりして下さい!!　こんな事で死んだとか、笑い事にもなりませんよ!!」

息が止まって危うく死にかけてるマスターくんを、慌てて私とティルフィングちゃん、ロンギヌスちゃんで何とか蘇生させると、開口一番軽い小言を言われたのは、ちょっとした余談だよ。その後、互いに悪かったという事で、謝りあって、洞窟の調査を再開する事にしたよ。って、いつの間に着いてたんだ。奥まで意外と短かったんだね。

ふぅ、マスターが息を吹き返してくれて良かったです。あっ、どうも。ロンギヌス、です。ここからは、私視点で進めていきます。
では、まずは状況の説明からしますね。今私達は、滝の裏側にあった細い道から奥へと入っていき、ちょっと開けた空間があったので、そこにいます。まぁ、行き止まりなので、おそらくここが目的地になるんだと思います。
今いる空間、ですが、奥に綺麗な青白く輝く水晶が安置されている以外は、特に目立った何かがある訳でなく、水晶自体も、私やティルフィングさんが触れても特に何も起きないので、少し手詰まりになっていました。
今、ちょうどティルフィングさんが、それをマスターに説明している所です。
「なるほどな。ん～、手詰まりか？」
「現状では、そう判断する以外ないですね。」
「・・・ここまで来て、何もない、か。仕方ない、一旦――」

――戻ろう、と、たぶんマスターが言いかけたその時です。急にマスターが動きを止めて、キョロキョロと周りを見渡し始めました。
「ま、マスター？　どうしたんですか？」
「・・・今、誰かがオレを、いや、助けを求める声が聞こえてきたんだ。何も聞こえなかったか？」
「・・・私達には、何も。ロンギヌス、フライシュッツ。あなた達はどうですか？」
「いえ、私にも聞こえてないです。」
「私も～。マスターくん、聞き間違いじゃないの？」
マスターにだけ聞こえるという助けを求める声に、困惑する私達。斬ル姫は本来、人よりも肉体だけでなく、感覚も鋭いので、マスター

にだけ聞こえて、私達に聞こえないというのは、いったいどういう事なんでしょうか？　フライシュッツさんは、聞き間違いじゃないかと言ってましたが。

「いや、確かに――――っ、また聞こえた!!」

そう言って、水晶の方へ視線を向けるマスター。すると、「まさか・・・。」と呟いて、徐ろに水晶の方へと近づいていき、それに手を触れました。

――――今思うと、ここで水晶に手を触れようとするマスターを、水晶の一番近くにいた私が止めていれば、何かが違ってたのかもしれません。でも、さっき私とティルフィングさんが触れても何も起きなかったのもあって、大丈夫だろうと、少し油断してたのかもしれません。

何はともあれ、マスターは水晶に手を触れてしまいました。おそらく、何も起こらないだろうと、そう思っていたのですが、現実はそれと真逆の状況になりました。

「っ、水晶が、光って・・・。」

「っ、ティルフィングちゃん　!!　足元見て!!」

「えっ？　っ、これは、魔法陣ですか!?」

「ええ!?」

マスターが水晶に手を触れると、突然水晶が光出し、この空間の床一面に魔法陣が浮かび上がってきました。しかも、水晶と魔法陣の輝きが、ドンドンと強くなっていき、気付いた時には、私達は光に包まれて、意識を失ってしまいました。

「っ、マスター・・・!!」

――――意識を失う直前、そんなティルフィングさんの悲痛な声が、聞こえた気がしました。

――――――それから、数時間経っても戻ってこないマスター達が心配になったアスカロンが、フォルカスをビーチに戻し、デュリン達にも相談してあちこち捜索したのだが、マスターやティルフィング達の姿も形も、まるで初めからいなかったかのように、ラグーナ島からなくなっていたのだった――――――。

第1章：特異点F――人理を救う者達との邂逅――
第9話：クレア、特異点に降り立つ

――声が、聞こえる。

「――ですか、彼――。いえ、――――しても、――。――――が彼の――へ接触し――――で、――――る事は――――いたのかもしれません。」

――何だ、この声。どこかで、聞いたことが・・・。

「ですが、おそ――――しょう。――い、――――で、――――界へ旅立った――――――――し。」

――・・・ダメだ。意識がぼやけて、殆ど、聞きとれない。何を、言ってるんだ。

「さて、――――いくの――――、――――――ままでは、――――。・・・――――が、少――――、――――でしょう。もちろん、――――刺激し――――に、ですが。」

――『刺激』？　何か、ヤバい事をやろうとしてるのか？　一体、何を・・・。

――ダメだ。意識が、沈んで・・・。

「――これで、良いでしょう。では、後は時の流れに任せましょう。」

「どうか、人の理を、獣達から救って上げてください。『クレア・バラージュ』。」

――意識を失う中、先程までぼやけて聞こえていた声が告げた言葉が、何故かオレの耳に残った。

「――ター。――スター！　――っかりしてください!!　返事をして!!　マスター!!」
「――っ、ハッ!!　・・・ティル？」
「っ、マスター!!　・・・良かった。気が付いたんですね・・・。」
「あぁ、何とかな。」

ティルの悲痛な声と揺さぶりを受けて、オレの意識は急速に浮上した。眼を開けると、そこには今にも泣きそうなティルの顔があって、オレが目を覚ましたのを見て、その顔が安堵の表情に変わった。その表情を見て、どうやら結構な時間、自分が意識を失っていたのだと気付いた。

とはいえ、表情が変わっても目元に涙がたまってるのは変わらないので、オレは安心させる意味も込めて、右手でティルのほほを撫でてやった。

「っ、マス、ター・・・？」
「そんな泣くなよ、ティル。お前が泣いてると、オレもちょっと悲しくなるだろ？」
「っ、誰のせいだと・・・。もう・・・！　でも、本当に良かった・・・。もし、あなたを失ってしまったらと思うと、私・・・、私・・・！」
「ティル・・・。」

そうだったな。ティルのキラーズ、『ティルフィング』は、伝承で使用者に絶対の勝利を齎す代わりに、その使用者を殺してしまう呪いがあるって伝わってるんだよな。だから、ティルは大切な人を失う事を、何より怖れている。仲間の事はもちろんだが、何よりマスター、もといオレがいなくなる事が、一番嫌なのだろう。実際、詳しい話は割

愛するが、オレとフライ姉が出会う切っ掛けになった事件（？）の時だって、部屋に戻ってきてからわんわん泣いて――――

「――――ってイッデ!?　なんで今ぶっ叩いた？」
「・・・今、何か失礼な事考えてた気がしたので。」
「ナチュラルに人の心読まないでくれよ。あと、照れ隠しで一々しばかれてたらオレの身が持たん。」
「て、照れてなんていません!!　もう、マスターなんて知りません!!
フンッ！」

ありゃりゃ、怒らせちまったか。でもまぁ、顔赤くなってる時点で、説得力がない気がするが。だが、状況が状況だし、一応謝っといた方がいいよな。

「すまん。まさか、昔の事思い出すだけで、機嫌損ねると思わなかったからさ。悪かった。」
「・・・いえ。わたしも、少し大人げなかったです。ごめんなさい。」
「・・・なら、おあいこって事にしよう。互いに悪い所があったって事で、さ。」
「そうですね。・・・ところでマスター、遅くなってしまいましたが、現在の状況を説明しましょうか？」
「ん、それもそうだな。頼む。」

ヤベェ、読者そっちのけで色々とネタに走っちまってたな。というかこの作品、ラグーナ島の辺りからか、ラブコメに走るとその傾向が顕著な気がするんだが、大丈夫か？
『大丈夫だ、問題ない（フラグ）』
（こいつ、直接脳内に!?）
――――っと、作者のアホに付き合ってる場合じゃなくて。とりあえず、状況の説明はして貰わないと。というか、ティルばっかに意識が向いてたから気が付いてなかったが、なんかやけに熱いな。それに何

というか、焦げくさい？　それに気づいたオレは、ティルから視線を外して上体を起こし、周りを見回して――――、絶句した。

「何、だと・・・。」

「・・・驚くのも、無理はないですよね。私達は先程まで、ラグーナ島の洞窟にいたはずなのですが、気が付いたら、こんな場所にいたんです。」

「・・・最っ悪だ。まさか、こんな事になるとはな。」

「マスター？」

目を覆って空を仰ぐと、ティルが疑問の声を上げたのが聞こえたが、今のオレの心情はそれどころじゃなかった。

いやまぁ、たぶん、というか絶対、十中八九あの水晶のせいだとは思う。オレもあの事件の元凶、ないしはそれに関係した何かの手がかりだと思ってはいたが、まさか『元凶の居る世界に飛ばす』代物だったと、誰が想像できただろうか。まぁ、タイトルとかクロスオーバー側のタイトルで察してたやつはいたかもしれんが。

――――今俺達がいる場所、それは『ＦＧＯ』において、序章に当たる特異点。『特異点Ｆ』と呼ばれる、２００４年の冬樹市の街中だった。

第１０話：状況整理？

「『魔術』に『魔術師』。『マスター『Ｆａｔｅ』シリーズにおいて、英霊（サーヴァント）を使役する魔術師達の事。身体の何処かに『令呪』と呼ばれるものを有しており、それがサーヴァントとの契約の証となっている。』、『英霊（サーヴァント）『Ｆａｔｅ』シリーズにおいて、過去の英雄や神話・伝承上の英雄等が、死後『座』と呼ばれる場所に招かれ、そこから後述の『聖杯戦争』の為に呼び出された存在。アーサー王やアレキサンダー大王など、知名度がとんでもない英霊もいれば、アンデルセンやモーツァルトなど、これは英雄なのかというものまでいるため、英霊と一口に言ってもピンからキリまで存在する。また、同じ英霊、例えばアーサー王でも、暴君のアーサー王だったり聖人君子のアーサー王、果ては聖剣ではなく聖槍を振るっていたアーサー王など、様々な『ＩＦ』も含めた別側面の英霊が複数存在するため、英霊一人とってもかなりの数の存在がいたりする（中には『ＩＦ』を通り越してもはや別人と言っても過言ではない存在もいるが、大抵公式の興が乗った結果、つまり『公式が病気』なだけなので、気にしてはいけない）。』、『聖杯戦争『Ｆａｔｅ』シリーズにおける物語の主軸であり、これ抜きで『Ｆａｔｅ』シリーズの様々な事件は語れない重要なファクター。ルールはシリーズ毎に大抵違っているが、基本は７人のマスターと、それに仕える７人のサーヴァントによる戦争という事になっている。そして、勝ち残った最後の一組が聖杯を手に入れ、望みを一つだけ叶える事が出来る。と言われているが、大抵色々な事情が絡み、結果望みを叶えた組はほぼ存在してない上に、この戦争のせいでホテル一つが無残に爆破されて倒壊したり、神社がぶっ壊れたり、大量に死人が出たり、公共施設一つが跡形もなく消し飛んで大災害が起こったりと、とにかく一般人からしたら大迷惑極まりない事態に発展しているのは確か。』。『レイシフト『Ｆａｔｅ／Ｇｒａｎｄ　ｏｒｄｅｒ（以降長いので『ＦＧＯ』と表記）』において、『特異点』と呼ばれる歴史がおかしくなってる場所へ量子ダイブする事。人間を擬似霊子という形に実際に肉体を分解することでデータ化して時間座

標に送り込んでいるらしく、ようはタイムマシンの一種。』、『人理『ＦＧＯ』てよく出てくる単語の一つ。一応、人類のこれまで、そしてこれからの歴史を指している模様。焼却文字通り『人理』を『焼却』する事。『ＦＧＯ』の事件の最大の原因であり、『王』と呼ばれる存在が人類の歴史を文字通り焼却した事を指す。その目的を語るのはネタバレになるため省略するが、これがきっかけで物語が『ＦＧＯ』の物語は本格的にスタートしたといえる。』・・・、それに、『聖杯探索（グランドオーダー）『ＦＧＯ』において、特異点を探索し、それぞれの特異点の原因となっている聖杯を回収する事を指す。回収した聖杯は、『霊器再臨』と呼ばれる、『ファントムオブキル（以下『ファンキル』も表記）』における進化を最大まで行い、レベルをＭＡＸまで上げたサーヴァントの限界突破素材として使える。』、ですか。」

「あぁ。オレが知ってるこの世界――――、そうだな・・・、仮にオレ達のいる『天上界』や悪魔のいる『地上界『ファンキル』におけるもう一つの世界。天上界と違って大地は荒廃しており、神の代わりに悪魔が支配している。』、ラグーナ島のある『海上界』っていう世界を一括りにしたものを『斬ル姫の世界』、この世界を『グランドオーダーの世界』と呼称するが・・・。この『グランドオーダーの世界』は、はっきり言って今オレ達の住んでる『斬ル姫の世界』とは、常識も何もかもが違う。正直、オレも『転生』なんていうイレギュラーで、前世の記憶を持ってここにいなかったら、確実に混乱してた自信がある。」

燃え盛る冬樹の街並みを見て、色々と感情が込み上げてきたのが一旦落ち着いて。

オレは今、ティルにこの世界が自分の知る異世界の一つである事、そして自分の知りうる知識を彼女と共有していた。正直、最初に合流できたのが、オレが『転生』というイレギュラーで『天上界』に生を受けた事を知っているティルで助かったと思った。もしフライ姉が先に合流してきてたらと思うと、説明が色々とメンドくさかったし。あと、余談・・・でもないが、オレ達の服装は今、ラグーナ島の時に来ていた水着とかではなく、普段オレ達が『天上界』でいる時の服装

に、なぜか戻っていた。まぁ、さすがに裸に近い格好で放り出されなかっただけ、マシと思うことにするか。
・・・そういえば、あの光に包まれたのは、あの場にいたオレとティル、ロンちゃんにフライ姉だったはず。オレやティルがこっちに来てるってことは、あの二人も多分来てるはずだけど。・・・まぁ、それに関しては、後でティルに会ってないかどうか、聞いてみるか。とにかく今は、この状況の整理をしよう。あの二人のことだし、そうそうやられる事はないはずだろうからな。
ティルはオレの説明を一通り飲み込むと、険しい表情で口を開いた。

「おおよそ、この世界の事は大体把握しました。ですが、だとすると、今の状況は非常に不味いかもしれません。」
「ん、どういう事だ？」
「・・・その、非常に申し上げにくいのですが。実は、この世界に来てから、私の力が、著しく弱体化しているのです。」
「っ、何だって!?」

ティルの一言に、オレは驚愕する。世界間を跨いで服装がなぜか変わった（戻ったともいえるが）とはいえ、流石に能力まで変化する事は予想だにしていなかった。不味い、もしティルに起こってる現象が他の二人にも起こってるとすると、どの程度弱体化してるかわからないが、早く合流しないとあの二人も厳しいかもしれない。特にロンちゃんは、今の強さに到達するまでにかなり時間がかかってたし。フライ姉は・・・、出会った頃ぐらいが普通なら、たぶん問題ないと思いたいが。
とにかく、早めに合流しないと、とオレはそう考えていたのだが、次にティルが発した一言で色々と思考が吹っ飛んでしまった。

「それと、もう一つ。以前と違って、マスターとの、その、魔力の繋がりのようなものを感じるんです。『パス』、とでもいえばいいのでしょ

うか？　とにかく、そんなものが・・・。実は、この繋がりのようなものを辿って、マスターを見つけられたのですが。」
「・・・えっ？」

『パス』、だと？　それはおかしい。確かに、『グランドオーダーの世界』にせよ、『斬ル姫の世界』にせよ、戦うものを使役する存在を『マスター』と呼ぶが、あり方が完全に違う。前者ならまぁ、使役する『サーヴァント』という存在が現界を維持するのに魔力を必要とするため、魔力のパスが互いに繋がってるものだが、後者に関しては完全に違うし、オレ達の関係で言えば、個人的なものを除けば、後者に属するはず。『斬ル姫』は基本、自力で魔力をどうにかできるし、肉体も普通に持ってるから、『グランドオーダーの世界』のマスターとサーヴァントの関係のように、魔力のパスを繋ぐ必要はない。なのに、ティルと魔力的な繋がりがあるというのは何故だ？　そう思いながら、右手のほうをちらっと見て――、気づいてしまった。

「・・・ハハッ。ここまで来るともう、驚く気すら起きないな。」
「ま、マスター？」
「・・・ティル、繋がりを一番感じるのって、もしかしてここか？」

そう言って、オレは心配そうな顔をしたティルに、右手の甲にある『剣と翼が交差したような赤い痣』を見せた。ティルは、その痣を見て一瞬口を覆いそうになっていたが、すぐに真剣な表情に戻って目を閉じ、しばらくすると目を開けて口を開いた。

「そう、ですね。そこから、特に繋がりを感じる気がします。」
「・・・なるほど。弱体化のほうはともかく、これで繋がりの方の謎が解けたな。」
「？　どういうことですか？」
「ティル、簡潔に言うぞ。たぶん、今のお前は――」

――サーヴァント、もしくはそれに近い存在になってる。
そう告げると、ティルは困惑した表情で、オレを見つめていた。

「・・・私が、サーヴァント、ですか？　ですが、身体はちゃんとありますし、魔力だって――」
「いや、おそらく肉体はそのままなんだろう。だけどこの痣、『令呪』によって魔力的な繋がりがあるって事は、ここではおそらく、ティルはオレの『サーヴァント』ってことになる、んだと思う。」
「・・・・・・。」

マスターから告げられた、今の私の状態。それは、先ほどマスターが、この世界の仕組みの時に話してくださった、魔術師であるマスターと、かつて私達のキラーズと同名の武器をふるった英霊、サーヴァントの関係と同じものである、というものでした。
かつて、とある三家が、この私たちがいる燃え盛る街、『冬樹』の街に作った『大聖杯』。そして、その大聖杯
によって選ばれた7人の『マスター』と、7基の英霊、『サーヴァント』による、願いを叶える為の戦い。それが、『聖杯戦争』。この話を前提とすると、今のマスターと私は、そのマスターとサーヴァントの関係と同じ、という事になります。ただ、自分の身体はそのままですし、魔力だって、マスターと繋がってる事以外、今までと違う点がないため、私としては、今一つピンと来ていないのが実情なのですが。
すると、私があまり理解が追い付いていないと判断したのか、困った顔をして、マスターがまた言葉をかけてきました。
「・・・あ～、まぁ急に言われてもピンとこないと思うから、とりあえず、そういうものだと思っててくれ。正直、オレもあんま分かってるとは言い難いしな。」

「・・・分かりました。そういえば、その一番繋がりを感じる右手の痣、『令呪』、と言いましたか。それは何なんですか？」
「あ～、オレ達だけの事を考えると、あんま関係ないと思って、軽くしかサーヴァントに関して話してなかったから、説明してなかったな。『令呪』、っていうのは、いわば契約の証で、『聖杯戦争』への参加権を有しているという証でもある。そして何より、マスターがサーヴァントに対して行える、回数制限付きの『絶対命令権』を行使する為の、魔力の印だな。」
「なるほど。その痣自体も、魔力を有しているんですね。それで、『絶対命令権』、というのは？」
「まぁ、簡単に言うと、マスター（こっち）が令呪に魔力を込める事で、サーヴァントに対してどんなことでも3回だけ命令できる、ってものだな。例えば、物理的にどれだけ離れてても、令呪を使えばすぐに自分の下に呼び寄せることができる、とか、どれだけ瀕死の重傷を負っててもそれを元通りにしてしまえるとか、正直、自分の中で可能だと思える事なら何でも、って感じだな。」
「な、なるほど・・・／／／」

マスターの話を聞いて、私は思わず、顔をそむけてしまいました。・・・少し顔が熱いのは、きっと周りの炎のせいです。ええ、きっとそうです。決して、マスターがそんな、い、『如何わしい目的』で、そんな大切なものを使うはずがないと分かってます。でも・・・、もし、そんな命令をされたら、私は――

「――あ～、その・・・。心配しなくても、ティルにそんな、如何わしい命令は絶対しないから！　だからその、心配しないでくれよ。な？」
「・・・えっ？」
「いや、その。なんかその、モジモジしてたから、さ。オレがそういう、その、ここでは言えないような事を命令するんじゃないかって、心配してるのかと、思ってさ。」

「・・・・・・・。」

・・・マスターの言葉を聞いて、私は今の自分の体勢を確認しました。右手は下腹部に、左手は胸に、そして、ぎゅっと体を抱きしめるような姿勢。・・・はい、平たく言って、誤解されても仕方ない、というより、誤解でもなんでもなく、そういう考えをしていたのは私なので、間違ってはいません。

・・・そう、間違ってはいないのです。ですが、色々と羞恥心を刺激され、挙句誰もいないとはいえ、こんな街中でそんな事を言われた私の思考回路は色々と振り切れてしまい、恥ずかしいのを通り越して怒りの感情が出てきてしまい、気づけば――

「――マスター。」
「ん？」
「正座。」
「はい？」
「正座してください。」

――こんな事を口走ってました。おそらく、数刻ほど前にビーチでマスターを海に突き落としたのを覚えていた私の頭が、手をあげる事だけはいけないと思ってはじき出した答えなんでしょうが・・・。今思うと、燃え盛る街中で正座をさせようとするというのも、なかなか問題がある気がします。はい。

「いや、流石に今はそんなこと言ってる場合じゃ「正座してください。」いやだかｒ「正座してください。」・・・すまん、悪かった。デリカシーがなかったのは悪かったから、だｋ「いいから正座しなさい!!」は、はい!!」

――その後、とある女性の悲鳴が聞こえるまで、私のマスターに対する説教は終わらなかったのでした。

第11話：合流と初邂逅

「キャアアアアアアアアア!!!」

「!?」

ティルからの説教を受けていたオレの耳に、女性の悲鳴が聞こえてきた。当然、ティルにも聞こえてきたようで、オレの前で腕組をして若干顔を絡めて怒っていた状態から、すぐに臨戦態勢に切り替えて悲鳴の聞こえた方角へと目を向けていた。

「・・・マスター、とりあえず説教はここまでにさせてもらいます。」

「あぁ、だな。(ここまでって事は、後でやるのか・・・？　まぁ、それはいいか。)とりあえず、今悲鳴が聞こえたほうに、ってイテテ・・・。」

「っ、マスター。大丈夫ですか？」

「・・・少なくとも、正座のせいで足がしびれて、しばらく大丈夫じゃないかもな。」

クソッ、自業自得とはいえ、正座のせいで動けないとかダサすぎる。・・・こうなったら、最悪ティルだけでも、と思っていると、ティルが急にオレの前で背中を向けて屈みだした。

「ティル。急にそんな姿勢をして、どうした？」

「いいから乗ってください！　非常時につき、おぶって運びます！」

「っ、いいのか？」

ティルは非常時だからと、オレをおぶって運ぶことにしたようだった。けど、正直男が女におぶられて運ばれるのはどうかと少し思うものの、それ以上にティルに迷惑をかけないか少し不安だった。が、そんな感情もティルが力強くこちらに笑いかける表情を見て、霧散した。

「非常時ですから。その代わり、降ろす時少し乱暴になるかもしれないので、それは勘弁してください。」
「・・・すまん、恩に着る！」
「いえ、こんな状態で正座させた私も悪いので、これでお相子です。」

オレはそう返すティルに急いでおぶられると、振り落とされないようしっかりティルの肩をつかんだ。それを確認したティルは、しっかり掴まってるようオレに優しく微笑みかけた後、凛とした表情でオレをおぶりながらも、猛スピードで悲鳴の聞こえたほうへと駆け抜け始めたのだった。

「もう、なんで私ばっかりこんな目に合わなきゃいけないのよ！　もうイヤァ!!」
「所長、落ち着いてください。ここで混乱していても、エネミーがまだ――」
「っ、マシュ！　まだ来てるよ！　前と右！」
「っ、ハァッ！　テヤァ！」

ティルフィングがクレアをおぶりながら悲鳴を聞きつけ、駆け抜け始めた頃。
件の悲鳴を上げた本人――『人理継続保証機関フィニス・カルデア『Ｆａｔｅ／Ｇｒａｎｄ　ｏｒｄｅｒ（以下長いので『ＦＧＯ』と表記）』にて、主人公達が所属する機関。通称『カルデア』（専らこっちで呼ばれる為、正式名称を知ってる方はどれ程いるのか。余談だが、主は長すぎて覚えていなかった。）。『時計塔』と呼ばれる魔術師達の総本山にいる１２人の『ロード（ようは長）』にして、天体科を牛耳るアニムスフィア家が管理する国連承認機関。責任者はオルガマリー・アニムスフィア。人類の未来を語る資料館としての役割を持ち、地球

環境モデル『カルデアス』を観測することによって、未来の人類社会の存続を世界に保障する保険機関のようなもので、『ＦＧＯ』物語開始直後は、その観測されるべき未来が『カルデアス』で観測できなくなった結果、その原因となっている『特異点Ｆ』を探るべく、主人公を含めた４８人のマスター適正者を招集する所から物語は始まる。基本的にゲームとしては所謂ホームのようなもので、仲間である英霊（サーヴァント）を召喚する場所もだいたいここ。その他にも、好きなサーヴァント一人と一緒にいれる『マイルーム』、英霊や英霊につける礼装の強化を行う『ラボ』等、色々な機能がある。また、作中の描写から食堂や医務室、その他研究等に使える施設等々、様々な施設が存在している模様。』の所長『オルガマリー・アニムスフィア』は、ティルフィング達がラグーナ島で相手したスケルトンや竜牙兵に囲まれ、パニックになっていた。一応、迎撃に関しては、合流したデミ・サーヴァント『Ｆａｔｅ』シリーズに登場する、特殊なサーヴァント。英霊と人間の融合体という存在で、身体能力や魔力系統の器官も全て人間よりも強化される。また、憑依した英霊が持つスキルを一つだけ継承し、自己流に昇華する特殊スキル「憑依継承（サクスィード・ファンタズム）」を持つ。ただし、純正のサーヴァントと比べ、人間の肉体を依り代にしているため、ダメージによる消滅が死に直結する。しかし、基本的に契約したマスターとサーヴァント同士でしか発生はせず、さらに混血が発生しないようにするためか、本来は不可能な技術とされている。その為、現状シリーズの中でも後述のマシュ以外には存在しておらず、マシュも特殊な成功例という事になっている。となった『マシュ・キリエライト『ＦＧＯ』の実質的なヒロインにして、先輩である主人公に献身的に尽くす後輩（実際はマシュの方が先輩なのだが、同じくカルデア所属のレフ教授曰く、「彼女にとって同年代くらいの人物はみな先輩」との事。）性格は礼儀正しく真面目で温和、たまに天然。他人を思いやり、気遣う心を持つ優しい少女。　一見クールで言葉少な目なため大人しい少女と思われやすいが、マシュ自身は好奇心旺盛であり行動的。控えめな様でいてグイグイ来る。ただしコミュニケーション経験が少ないためかセリフ回しが独特であり、た

まに直球な事もあり。物語開始直後は普通の人間（正確には違うが、ネタバレを含む為割愛）だったのだが、とある経緯であるサーヴァントから力を継承し、デミ・サーヴァントの唯一の成功例となる。その後はマスターである主人公と共に、人類の未来の為に戦って行くこととなる。ゲーム中のサーヴァントの性能としては、初期獲得のサーヴァントの為、性能は並。所謂タンク役的な役割を持ち、自身も含めた味方全体に防御バフを撒いたり、1ターンの間だけ味方一体を無敵状態にして、かつその味方のＮＰ（ようは奥義ゲージ）を貯める事が出来る為、使い勝手はかなりいい。また、本来サーヴァント等を編成する際、コスト制限があるのだが、彼女のみどんな状況下でも編成する際のコストが『０』の為、礼装分のコストさえ余っていれば彼女を余った枠に編成する事も可能。さらに、ストーリーが進むに連れて、自動的にスキルや霊器再臨（『ファンキル』でいう所の進化）が行われる為、レベル上げさえしっかりしていれば、終盤以降もスタメンをはれるぐらい優秀なので、迷ったら育てておくのはかなりオススメ。特に後半、持っているメンバー次第では彼女がいないと辛い場面もあるので、タンク役が不足している場合は彼女を最優先で育てるのもあり。』が務め、そのスケルトン達をマシュのマスターとなっている一般公募で選ばれた４８番目のマスター候補、『藤丸立香『ＦＧＯ』の主人公にして、プレイヤーの分身。『藤丸立香』はデフォルトネームで、男女どちらを選択してもこれは変わらない。今作では女性の主人公を採用している。性格は前向きで若干能天気。セリフは少なく各所の選択肢で一部の心情が伺える程度だが、素人ながらもハッキリものを言う性格をしている。恐怖の前には人並みに怯えたり足がすくむが、決して希望を忘れないポジティブな精神の持ち主で、ネガティブな事はひきずらない、細かい事もさほど気にならないという前向きタイプ。炎の中マシュの手を最後まで握る、一般的に危険視される反英雄（英霊の中でもどちらかというと悪よりの英霊達の事。）にも信頼を置く、自分を襲った敵に食糧を分けるなど、基本的に人が良い上に、それが相手（敵）にとっても自分にとっても最善だと信じれば積極的に身体を張ることもある向こう見ず。　が、今までの『Ｆａｔｅ』シリー

ズの主人公達と比べると、そこまで脱一般人をしている訳でもなく、無理だと判ればあっさり諦め、少しでも可能性があるなら無理無茶を通そうとする、良くも悪くも『平凡な一般人』といった感性の持ち主でもある。物語開始直後は、色々あってオルガマリーに『特異点F』の調査から外されるも、その後カルデア内で起こった爆発事故に導かれるように事故現場へ趣き、そこでマシュを発見。死にそうになっている彼女の最期の願いを聞き入れ、手を握りしめた所で『特異点F』へレイシフト、以降マシュや様々な英霊のマスターとなって、人類の未来の為に戦っていく。なお、公式の漫画や二次創作では、よく性格やキャラ崩壊を起こしていることが多く、中には原型が何処か宇宙の彼方へ行ってしまったかのようなものまで存在していたりもする。まぁ、あらゆる意味で平凡な為、弄りやすいのがおそらく原因。人によっては人類悪になったり、逆にマシュを慕う後輩になったり、はたまた廃課金勢のガチャ魔神となったりと、七変化とかいうレベルでは語れないレベルで変化するのがこの主人公だったりする。ただ、この作品だとクレアがいる関係で、そこまで妙な変化を起こす事はない、はず・・・。たぶん。』が見つけては、マシュにどこから来てるか指示を出して切り抜けている。が、如何せんマシュの武器は、デミ・サーヴァントとして覚醒する直前、自分に力を貸してくれたサーヴァントの持っていた武器である盾のみ。一応、盾を振り回してスケルトン達を砕いたり吹き飛ばす事はできるが、ここには戦いに慣れてない面子しかいないのもあって、徐々にジリ貧なのは否めなくなってきていた。最前衛で戦闘を続けているマシュはそれをひしひしと感じ始めており、最悪の場合はマスターである立香と所長のオルガマリーだけでも逃がさければ、と考えていた。

しかし、それを押し寄せるスケルトン達を捌きながら、まだ戦いなれていないマシュが考えてしまったのがいけなかった。いくらデミ・サーヴァントになったといっても、元はただの少女。慣れない並列思考（マルチタスク）をした結果――、それは決定的な意識の『隙』となってしまった。

「っ、マシュ!!」
「っ、しまっ、くぅっ！」

立香の声で、マシュが慌てて現実に意識を引き戻すと、1体のスケルトンが目前に迫っており、武器を振りかぶっていた。咄嗟に盾を引き戻すも、戦い慣れしていないマシュにすぐさましっかりした構えがとれるわけもなく、スケルトンの一撃に思わずたじろいでしまった。そして、そのたじろいだ隙に、3体のスケルトンがマシュの横を抜けて立香達のもとへと群がっていった。

「っ、マスター！　所長！　逃げてください!!」
「あっ・・・。」
「ヒィ!!　こ、来ないでぇ!!」

スケルトン達の接近に、思わず呆けてしまう立香。一方、もはやパニックでまともな思考もできていないオルガマリーは右手を構えてガント『Ｆａｔｅ』シリーズにおける、呪いを込めた魔術の弾丸。元々は、相手を指差す事で体調を悪くして病気にするという一種の呪術で、あくまでも病気にする呪術であるため普通なら物理的な効果は持たないが、最上級のものは「フィンの一撃」と呼称され、物理的な破壊力を有する。また、物理的な効果を持たないとしても「フィンの一撃」と呼称されるレベルであれば心臓麻痺で即死させることもできる。『Ｆａｔｅ』シリーズの魔術系攻撃というと、だいたいこれを浮かべる人も多いはず。を打ち、スケルトン達を遠ざけようとするも、狙いの定まっていない今のオルガマリーでは当てられるはずもなく、ついに1体が接近して、その手に持つ剣を振り上げた。マシュも急いで目の前のスケルトンを倒して立香達のもとへ行こうとするも、迎撃する際に少し距離を開けすぎたせいか、二人とスケルトンの間に割り込むにはもう時間がなかった。――――そう、頭ではわかってても、止まる事はできなかった。『奇跡』という一縷の望みにかけて、マシュは足を止めることはできなかったのだ。

しかし、無情にも剣は振り下ろされてしまう。オルガマリーはこれ以上、現実を直視したくないのか顔を覆い、立香は思考が止まったのか呆然としていた。そして、そこに必死に手を伸ばして、マシュは間に合えという思いで立香達のもとへと急ぐが、次の瞬間、自分の目の前で二人がスケルトンに殺されてしまう未来を想像して――――

――しかし、その想像が現実になることはなかった。

「――――フッ！　ハァッ！」「グエッ・・・!?」
「やぁぁ!!　たぁぁ!!」
「え～い！」

――――立香達とスケルトンの間に、桃色と黄色の閃光が駆けた瞬間、二人に剣を振り下ろしていたスケルトンはその場から吹っ飛ばされていた。そしてその後、大きな物体が振り下ろされる音と銃声が聞こえ、立香達の目の前に残っていたのは、白いライフルを持った、色々と際どい白い服装をした、紫髪の女性と、自分の身の丈以上の巨大な柄の長い大剣（？）を持った茶髪の少女、そして、金髪のボーイッシュな格好をした少女をおぶった桃色の髪の女剣士だった。

「――――ロンギヌス、フライシュッッ。貴女達も無事だったんですね。」
「はい。ティルフィングさんや、マスターも。ご無事で何よりです。」
「こっちはロンギヌスちゃんと一緒だったから、もしかしたら～って思ってたんだけど。いや～、二人とも無事でよかったよ～。」

悲鳴を聞きつけ、マスターをおぶって走り抜けた私は、その先で、ラ

グーナ島で戦った異形の存在に今にも襲われそうになっている二人の少女を見つけ、急いで剣を差し込んで異形の剣を払いあげ、その勢いのままに回転して一閃し、倒しました。そして、すぐに2体の異形を見つけて攻撃しようとしたのですが、横から銃声と、大きなものを振り上げる音がしたので、そちらをチラリと見ると、はぐれていたロンギヌスとフライシュッツがいました。

そして服装に関しては、私と同じで水着ではなく、やはり元の服装に戻っていました。

二人が異形へ攻撃を仕掛けて倒したところで、私は二人に声をかけたのが、上記の会話です。なるほど、2人ずつで分かれていた形だったのですか。・・・ある意味、戦闘員と非戦闘員の組み合わせだった私達は、結構危険だったのかもしれませんね。

そう考えていると、フライシュッツが少しジトーっとした目でこちらを見て口を開きました。

「ところでティルフィングちゃん、な～んでマスター君をおぶってるの？」

「えっ？　あ～、その、色々とありまして・・・。って、マスター？」

フライシュッツにマスターをおぶってる理由を問われ、どう答えたものかと思案し始めた時、ふと違和感を覚えました。ロンギヌス達に合流したにもかかわらず、マスターが先程から、何の反応も示していないのです。それも、フライシュッツにこういう事を尋ねられているにもかかわらず、です。大抵こういう場合、すぐにでも反応してフォローしてくださるのに。

そう思って、マスターのほうに顔を向けると――

「(チ～ン)・・・。」

「ま、マスター!?」

「ま、マスターくん!?　ちょっとティルフィングちゃん、どんなスピードで走ってきたの?!」

「どんなって、そんなのいつも通りのスピードですけど、あっ・・・。」

そこまで話して、私はミスを犯していたことに気づきました。今まで、マスターをおぶる事は何度かありましたが、おぶって走る事が無かった為、いつも通りの感覚で走り抜けてしまっていました。その上、先程二人の少女を助ける為におおよそ無茶な急制動をかけてしまったので、おそらくその結果、気絶してしまったのではないかと。

そして、私がしまったと思ったのを読み取ったロンギヌスが、大慌てでマスターの無事を確認しに来て、私はフライシュッツにすごい剣幕で怒られました。

「てい、ティルフィングさん！　いったんマスターを下ろしてください！　マスター、大丈夫ですか!?」

「ちょっとティルフィングちゃん！　いつも通りで走った上にあんな無茶な急制動をかけたら、いくらマスターくんが気絶するにきまってるじゃない!!　ごくごく普通の人間なんだから!!」

「す、すみません！　マスターをおぶって走ったり戦う事なんて、今までしたことがなかったもので。それに、先ほどは彼女たちを助けないといけないという思考でいっぱいいっぱいでして・・・。」

「にしたって、もうちょっと加減を――」

「えっと、そこの女の子三人!!　誰だか知らないけど、喧嘩する前にあっちを手伝ってもらっていいかな!?」

「「えっ？」」

唐突に私達以外の声が聞こえてそちらを一斉に向くと、私達が助けた少女が、私たちの後ろのほうを指さしていたので、視線をそちらに向けると、大きな・・・『盾』、でしょうか？　それを構えた少女が、ラグーナ島で遭遇した骨の異形達を相手にしていました。しかし、盾の少女は戦い慣れていないのか、腰もうまく据わっておらず、ただただ盾を振り回したり、盾事突進したりして骨の異形を追い払っている感じでした。なるほど、確かにあれは助太刀したほうがよさそうですが、それだとマスターが――

「――――ティルフィングさん、フライシュッツさん！　ここは私が見てるので、お二人はあの子の加勢に行ってください！」
「ロンギヌス（ちゃん）？」
「マスターや彼女達の事は、私が見てますから。それにこのままだと、またさっきみたいに物量で押し切られちゃうかもしれませんから！　だから、行ってください！」

ロンギヌスの提案を聞いて、少し思案する。確かに、現状このままでは落ち着いて話し合う事も、マスターの様態を確認する事も満足にできそうにない。となると、まずはあの異形達を黙らせた方が早いですか。・・・というより、マスターが気絶してるのを見て、取り乱してしまった私達がいけなかったのですが。平時であれば、すぐに判断出来ていた事が出来なかったなんて、マスターに聞かれたら怒られそうです。

「・・・そうですね。フライシュッツ、私への小言は後に回してください！　まずは、この状況をどうにかします！」
「ん～、しょうがないな～。まぁ、マスターくんが起きてても、きっと同じこと言うだろうし。その代わり、後で色々と言いたいこと言わせてもらうからね！」
「お手柔らかにお願いしますよ。」

ロンギヌスの提案に従い、私は盾の少女を援護するため、彼女の元へ駆けていきました。そして、フライシュッツはというと、狙撃の構えに入って、こちらが前進しやすいよう援護射撃と、私や盾の少女が撃破し損ねた敵の排除を始めていました。基本的に、マスターが絡まなければ、私とフライシュッツの組み合わせは前衛後衛と役割を分担できますし、何よりフライシュッツの援護射撃は的確で、こちらが動きやすいように援護してくれるので、よくマスターにも「相性だけ考えるなら、一番最高の組み合わせ、『ベストマッチ』だよな。」と言わ

れます。・・・まぁ、ここまでの様子をご覧になってる皆さまでしたら、その後どうなるかは火を見るよりも明らかかもしれませんが。
とにかく、そんな（マスターから見て）『ベストマッチ』な私達は、瞬く間に盾の少女の撃ち洩らしを撃破して、未だに数体の骨の異形達に苦戦している盾の少女の援護に入りました。

「遅くなってすみません。助太刀します！」
「後ろからの援護は、お姉ちゃんに任せてね～。」
「っ、あなた達は！　・・・助かります！　私一人では、とてもではないですが、あの二人を守り切れなかったかもしれないので・・・。」

そういう彼女の表情は、悔し気に歪んでいました。疲労の色も見え隠れしているのを見るに、長時間戦闘を続けていたか、戦いに慣れてないか、あるいはその両方かと、私の中で推測が出ました。が、それを今ここで確認している時間はなさそうですし、気にしていても仕方ないですね。というより、本来は防具として使う盾、それもかなり大きめの『大盾』ともいえるものを鈍器のようにして、あの骨達を撃退していた事自体、かなり体力を使う作業でしょうから、戦い慣れているいないに関わらず、疲労度はこちら以上だと思います。であれば、こちらが主体となって動いた方がよさそうですね。・・・向こうからすればポッと出なので、今からする指示に、素直に従ってくれればいいですが。

「いきなり現れて指示を出されても困るかもしれませんが、あなたは一度後ろに下がって、彼女達を守って下さい。後の戦線は私達が持たせます！」
「えっ？　ですが、それではマスター達を守る事が・・・。」

そう言って、私の指示に従う事を渋る盾の少女に、優しく諭すようにフライシュッツが声をかけました。

「何も、前に出る事だけが『守る事』じゃないよ～。キミの本領は、その『盾』で襲ってくる外敵を通さない事でしょ？　積極的に攻めるのは、私達のや・く・め♪　だから、もう無理に前に出て、体力を浪費する必要もないよ。ほら、よくいうじゃない？　『適材適所』って。」
「・・・・・・。」
「だいじょ～ぶ♪　それなりに修羅場潜ってきてるし、あんな骨達ぐらいなら、簡単にやられたりしないよ。だから、ここはお姉さん達に任せて。ね？」
「・・・分かりました。でも、マスターの指示次第では、私も前に出ますから。」
「構いません。今の指示はあくまで、前に出てきた私達のわがままですから。本来指揮するべき方が居るのなら、そちらの指示に従って下さい。」
「はい！」

盾の少女はそう言うと、急いでロンギヌス達のいる辺りへと戻って行きました。その間、追いすがろうとする敵には私が剣を振り抜き、フライシュッツが狙撃して妨害、あるいが撃退する事で、侵攻を阻止していました。そして、しばらくしてチラリと見ると、盾の少女はロンギヌス達と無事合流しており、それを確認した私とフライシュッツは一瞬だけ顔を見合わせ、互いにどちらからともなく頷きあうと、骨の異形達を殲滅を開始しました。
戦闘自体は弱体化してしまった私でも難なくこなせるほどで、フライシュッツも依然と変わらず的確な狙撃でこちらを援護してくれたおかげで、向こうにいた時より攻撃を多めに叩き込む必要はあったものの、殆ど同じように骨の異形達を相手に出来ました。それと、向こうでの戦闘の様に、この異形達はどこかから生成されたもの、という訳ではなさそうなので、ある一定数倒すと、周りにはもう残敵は存在しなくなっていました。
それを確認した私達は、一度後方で待つマスター達の元へと合流することを決めました。

そして、マスター達のもとへと合流した私たち二人だったのですが、合流した先ではマスターが意識を取り戻していましたので、先ほどの事に付いて謝罪しようと思ったのですが――――

「・・・・・・。」（困り顔）
「・・・・・・・。」（警戒）
「え、え～っとぉ・・・。」（困惑）
「あの、所長さん。ちょっと落ち着きましょうよ。ね？　助けてくれたんだし、決して悪い人たちじゃ「アンタは黙ってて！」、・・・ハイ（ショボン）。」
「マスター。その、今の所長は、下手に刺激しない方がいいかと・・・。」

――――『所長』、と呼ばれる少女が宥めようとした朱色の髪の少女を一括して黙らせながら、意識の戻った私達のマスターをにらみつけて警戒しており、睨みつけられているマスターもマスターで困った表情をしていました。そして、ロンギヌスはというと、この状況をどう収めるべきかわからず、困惑していました。

・・・とてもじゃないですが、これじゃ謝罪どころじゃないですね。ともかく、先にこの状況をどうにかしないといけませんね。一段落、というには、まだ早いようです。